

押野ウマワタリ遺跡

押野第二土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

石川県野々市町押野第二土地区画整理組合
野々市町教育委員会

押野ウマワタリ遺跡

押野第二土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

石川県野々市町押野第二土地区画整理組合
野々市町教育委員会

例　　言

- 1 本書は石川県野々市町押野4丁目地内に所在する押野ウマワタリ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は押野第二土地区画整理事業に係るもので、平成2年度、平成3年度にわたって野々市町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査、本書執筆は田村昌宏が担当した。
- 4 発掘調査及び本書の執筆にあたっては下記の方々から御教示を得た。
木立雅朗　楠正勝　柄木英道　安英樹　横山貴広　吉田淳（敬称略）
- 5 出土遺物整理は川端敦子　中小田博子　中出正子が行った。遺物写真の撮影、編集は田村昌宏が行った。
- 6 本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を表示し、水平基準は海拔高（m）で表示する。また、写真図版中の出土遺物に付された番号は挿図の出土遺物実測図中の番号に対応する。
 - (2) 各図の縮尺は以下のとおりである。
遺構 1/20 1/80 1/200 1/400
土器 1/3 石器 1/1 1/3 1/5
 - (3) 土器実測図は断面黒塗りが須恵器、白抜きが縄文土器・弥生土器・中近世陶磁器、スクリントーンを貼ったものは赤彩を意味する。
 - (4) 遺構名の略号は次のとおりである。
堅穴建物跡（S I）　掘立柱建物跡（S B）　土坑（S K）　溝（S D）
小穴（P）　不明遺構（S X）
- 7 本遺跡の出土遺物、記録資料は本町教育委員会で保管している。

目 次

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	2
第3章 旧地形と基本土層	6
第4章 遺構	8
第1節 壘穴建物跡	8
第2節 掘立柱建物跡	12
第3節 土坑、溝、その他	14
第5章 遺物	17
第1節 土器、陶磁器、土製品	17
第2節 石製品等	18
第6章 小結	38
観察表	40
写真図版	46

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境



第1図 野々市町位置図

押野ウマワタリ遺跡は、石川県のほぼ中央の金沢市南部に位置する野々市町押野地区内に所在する。野々市町は金沢平野のほぼ中央、山海がなく起伏の乏しい平坦地で、東西4.5km、南北6.7km、面積13.45km²という小さな町である。土質は肥沃で豊富な地下水に恵まれているため稻作農業に適しており、昭和40年代までは田園地帯が広がり集落が点在するなどかな風景であった。昭和50年代以降は北陸地方の中核都市金沢市の隣町という条件もあり、急激な人口増加が進み、現在は3万7千人を有する日本海沿岸の雄町となっている。本遺跡の所在する押野4丁目は野々市町の北東端に位置しすぐ隣は金沢市となる。遺跡の周辺一帯は準工業地帯となっており、工場と住宅が混在する。また、本遺跡のすぐ南には金沢市—松任市を結ぶ国道157号線が走っており、交通網の充実と同時に都市化の波が著しい環境となっている。

野々市町は雲峰白山を源とする石川県最長の河川手取川によって形成された扇状地上に立地する。町の大部分は扇央部にあるが、北端の御経塚や押野地区は扇端部にあたり、昭和30年代までは自噴水がみられた。本遺跡の東約300m先には金沢平野東方にある富樫丘陵から派生する高橋川が北方へ流出し、小規模な扇状地を形成している。本遺跡は手取川扇状地の扇端部と高橋川水系が形作った自然堤防の狭間に位置する。

第2節 歴史的環境

金沢市南部地域は遺跡の宝庫である。この地域は古来から人々が生活するに適していたと見られ、集落遺跡はもとより古墳、中世城館など多種多様な遺跡が点在している。以下、この数ある遺跡の中で縄文時代から近世までの主要なものを選出して紹介していきたい。

縄文時代では⑩御経塚遺跡、⑥新保本町チカモリ遺跡、⑫米原遺跡など人々の生活体系を伺うことができる大規模な集落遺跡が発見されている。これらの遺跡が存在する地域は前節でも述べたように手取川から流れ出る地下水が地上に湧き出る自噴水地帯である。この自噴水の存在が縄文時代から脈々と続く集落形態の本拠地となっていたようである。

弥生時代は後期後半を中心とした集落遺跡が多く発見されている。本遺跡から西約300m進んだところに中期から終末期にかけての大集落跡となる⑩押野タチナカ遺跡が存在する。竪穴建物跡21棟、掘立柱建物跡6棟確認している。本遺跡の北方約400mのところには後期後半（法仏期）

の集落遺跡となる⑩押野大塚遺跡が存在し、掘立柱建物跡や土坑などが見つかっている。前述した高橋川水系のエリアにも後期後半の集落跡が点在する。本遺跡から東南約1kmには堅穴建物跡15棟検出した⑪高橋セボネ遺跡が所在する。高橋セボネ遺跡から約800m南に⑫肩が丘ハワイゴク遺跡、こより更に南方1kmの富樺丘陵裾部には⑬額谷ドウシング遺跡が所在する。また、図示していないが現御経塚遺跡公園の北東隣には終末期の集落遺跡として名高い御経塚ツカダ遺跡が存在する。

古墳時代の遺跡は各地で集落跡や古墳跡が散在しているが、弥生時代と比べて相対的に少なくなる。野々市町内ではこの時期の遺跡はほとんど確認していない。④古府ケルビ遺跡は初頭の指標となる上土器が出土している。前期は集落遺跡の⑦上荒屋遺跡、前方後方墳を確認した⑧御経塚シンデン遺跡、十坑墓群をもった⑨高島遺跡が知られる。中期にはいると全長50mの前方後円墳である⑩長坂二子塚古墳、後期は円墳と推定される⑪おまる塚古墳などが見られる。

古代に入ると金沢平野一帯に豪族の台頭が生まれる。7世紀には野々市町の南西端に古代寺院の⑫末松庵寺跡が建てられる。この古代寺院建立を境にこれまで未開の地であった扇状地の扇尖部に人の手が加わり集落が営まれるようになった。⑬栗田遺跡や⑭下新庄アラチ遺跡は本遺跡から南へ3~4km離れたところにあり、8~9世紀の堅穴建物跡や掘立柱建物跡を多数確認している。また、野々市町の北西部一帯には東大寺領の荘園遺跡である⑮横江莊々家跡や⑯上荒屋遺跡が存在する。

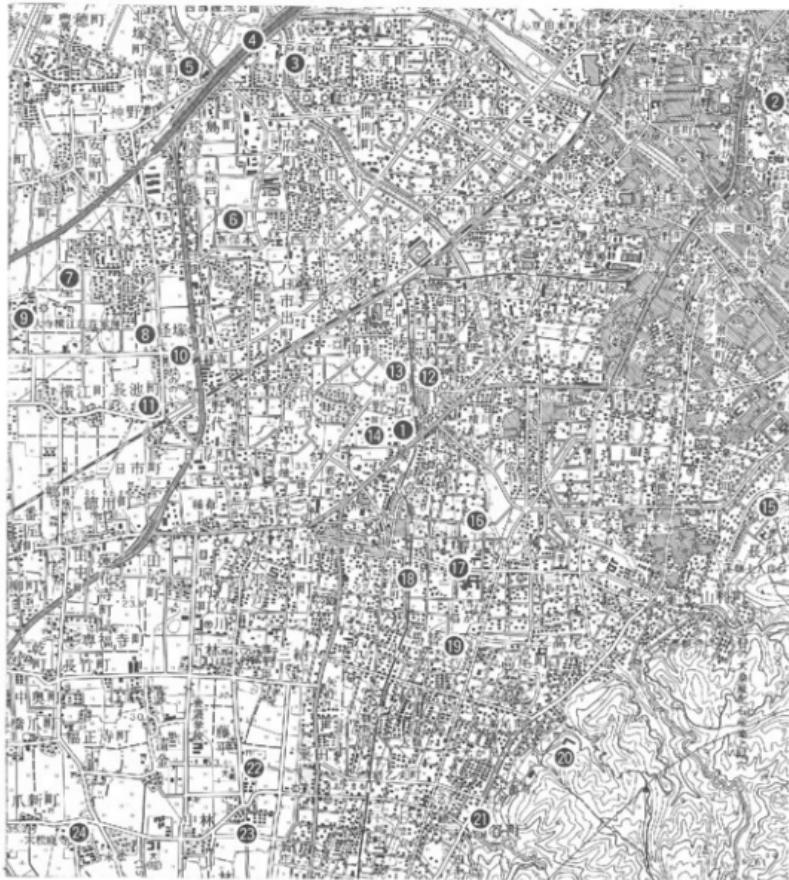
中世においては野々市町住吉町地内に守護富樺氏が居住した⑯富樺館跡が存在し、室町期の加賀国の治政の中心地となった。この館跡から東南約2km進んだところには富樺氏の詰城にあたる⑰高尾城跡がある。また、野々市町北西端の⑱長池キタバシ遺跡からは14~15世紀にかけての集落遺跡を確認している。

近世になると本願寺の拠点であった金沢御坊の跡地に藩主前田氏の居城金沢城を築き、幕藩体制のもと加賀国の統治を行う。野々市は金沢城下町の近郊農村として発展していき、現在ある集落は江戸時代には確立していったと考えられる。

第2章 調査に至る経緯と経過

押野ウマワタリ遺跡発掘調査は野々市町押野第二土地区画整理事業に伴う緊急調査事業である。押野第二土地区画整理地区周辺は早くから準工業地域に指定されており、周囲には工場や宅地の立地が目立つ。また、本地区東方には北陸鉄道石川線が南北に、南方には一般国道157号線が東西に走り、交通体系の整備が整っている地帶である。当該地区は工場や宅地が建ち並ぶ環境の中、水田が残っていた箇所である。平成2年、区画道路・水路等の公共施設の整備を図り、良好な立地環境の工場用地として整備することを目的に土地区画整理事業が計画された。対象面積は9,730m²である。

平成2年3月、本土地区画整理事業地区内における埋蔵文化財の調査依頼があった。野々市町



- | | | |
|--------------|-------------|---------------|
| 1 押野ウマワタリ遺跡 | 9 横江莊々家跡 | 17 扇が丘ゴシヨ遺跡 |
| 2 金沢城跡 | 10 御経塚遺跡 | 18 富裡館跡 |
| 3 高島遺跡 | 11 長池キタバシ遺跡 | 19 扇が丘ハイゴク遺跡 |
| 4 古府クルビ遺跡 | 12 米泉遺跡 | 20 高尾城跡 |
| 5 おまる塚古墳 | 13 押野大塚遺跡 | 21 須谷ドウシンドア遺跡 |
| 6 新保本町チカモリ遺跡 | 14 押野タチナカ遺跡 | 22 粟田遺跡 |
| 7 上荒屋遺跡 | 15 長坂二子塚古墳 | 23 下新庄アラチ遺跡 |
| 8 御経塚シンデン遺跡 | 16 高橋セボネ遺跡 | 24 末松庵寺跡 |

第2図 周辺の遺跡 (1/50000)



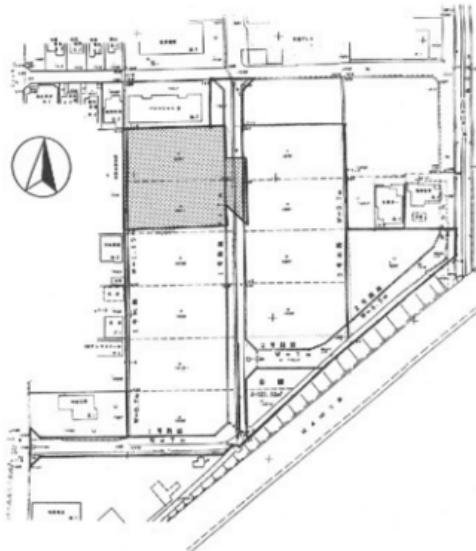
第3図 区画整理事業区域図 (1/2500)

九一

教育委員会は直ちに事業地区内での試掘調査を開始した。試掘調査は地区内に12箇所の試掘トレーニチを設定して、小型掘削機を使用して遺跡の有無及び範囲を確定する方法を行った。また、補足調査として検土杖を用いて21箇所の地点で土層観察を実施した。

結果、4箇所のトレーニチから溝及び柱穴状遺構、3箇所のトレーニチから土器を確認した。溝状遺構は3箇所のトレーニチで確認し、いずれも幅約30~35cmの規模を有する。柱穴状遺構は2箇所のトレーニチで見つかり、直径約30~50cmを測る。遺物はすべてが弥生土器であった。

この試掘調査結果から本区画整理地区内には弥生時代の遺跡が存在することが判明し、区画整理工事着手前に発掘調査が必要となった。発見された遺構・遺物は本区画整理地区的北西に集中することから、発掘調査対象地を北西側の田地2筆分にあたる約1,600m²を範囲とした。後日、押野第二土地区画整理組合、野々市町教育委員会、野々市町都市整備課の3者で協議し、平成2~3年度にかけて発掘調査を実施することで合意に達した。調査の行程は平成2年度は公用施設（東側南北道路及び西側南北水路）を対象とした約300m²を7月7日~7月18日にかけて実施し、平成3年度は公用施設を除いた遺跡範囲全域の約1,300m²で、4月8日~5月31日にかけて行った。



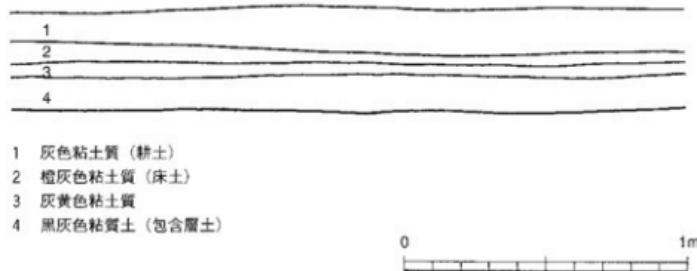
第4図 発掘調査区域図 (1/2000)

第3章 旧地形と基本土層

本遺跡の層序は大きく5層に分かれる。表土は現在の水田の層で、約15~40cmにかけて堆積する。その下には約5~10cm弱の水田床土（橙灰色粘質土）が貼り付いている。さらにその下には約10cm程度の灰黄色粘質土が堆積する。この層は現水田以前の耕作土と考えられるが、遺物はほとんど確認できず、詳細な時期は不明である。しかし、第3章で報告する中世溝S D28はこの層の下4の遺物包含層から掘り込んでいることから、近世から昭和初期の耕地整理前の間の層序と推定される。この3より下層は前述したとおり約15cmの厚さをもつ遺物包含層（黒灰色粘質土）である。その下の層は黄褐色粘質土の地山土である。粘質土ではあるが粗砂や小石が若干混じっており水はけはよい。地山面の標高値は海拔約12~13mで、南から北へゆっくりと下る。

試掘調査の結果、発掘区域外の区画整理地区の地山土はほとんどが石礫層であった。特に区画整理地区南東側は表土直下で石礫土をもった地山となる。地山の標高は遺跡の存在する所より高い形状となるが、約50cm程高くなるだけで際だった高低はもたない。元来の旧地形は起伏の差は大きかったと思われるが後世の耕地開発などによって削平されたようである。この石礫土が額を出す地山層には人々の営む痕跡は見られなかった。これは石礫土よりも掘削作業のしやすい粘質土層上に集落を形成しようとしたためか、本来石礫土にも存在していた遺跡が後世の開発で削平されたためと考えられる。

L=14.0m —



第5図 調査区南壁土層断面図 (S=1/20)



第6図 押野ウマワトリ跡 遺構平面図 (S=1/200)

第4章 遺構

第1節 壇穴建物跡

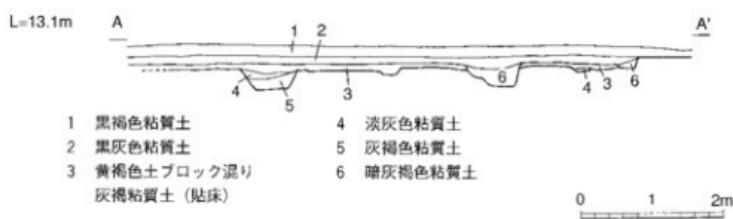
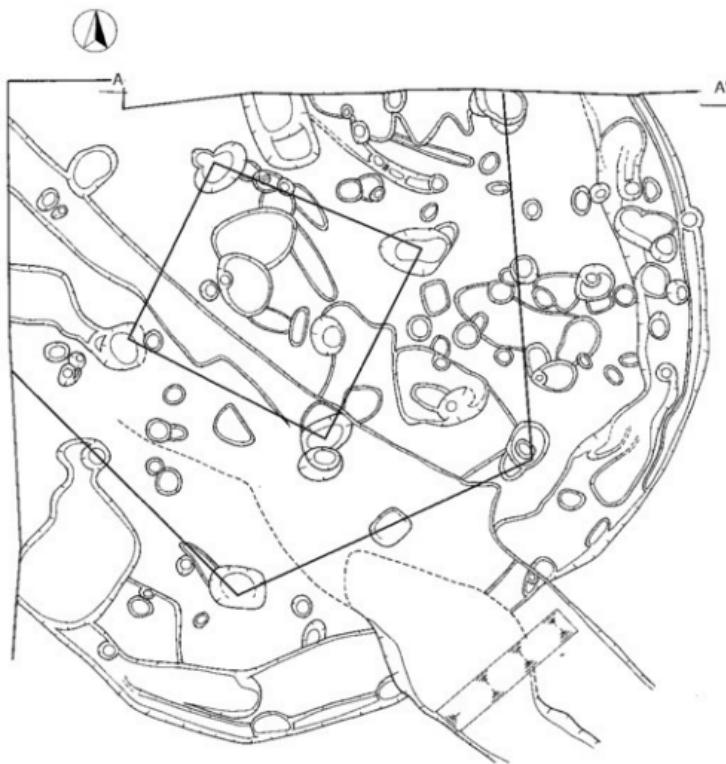
S I - 1 (第7図)

調査区の北西隅で確認された最大長11.4mの多角形を呈する大型の壇穴建物である。建物の半分は調査区外に延び、全貌は明らかでない。主柱穴は3個確認できた。壁溝のラインは明確でないが柱穴の配置等から五角形のプランになると考えられる。主柱穴は直径50~80cm、深さ床面から約40~50cmで周囲のピットに比べ規模が大きい。柱穴間の距離は4.5~5mで主柱穴の間には直径30~50cmの支柱穴が存在する。また、この主柱穴ラインの内部にも直径70~100cm、深さ床面から約30cmのピットが4個見つかり、1間×1間の柱穴と考えられる。穴と穴の間の長さは約3mで、穴の位置は前述した主柱穴と主柱穴の間に配置している。壁溝は幅約25cmで1回掘り直している。この壁溝の堆積状況から本来の壇穴は最大長9.6mのものから11.4mの規模に拡張したことがわかった。また、先に説明した柱穴において掘方の形が方形や不定型なものなど千差万別で、大きさや深さも均一していない。おそらく壇穴改修の際、柱の位置を変えずに木柱材の組み替えをおこなったためと推察される。床面は黄褐色粘質上の貼床をもつが、一部しか確認できなかった。壇穴内には小規模なピットや溝が錯綜しているが、同時期に併存していたかはよくわからない。壇穴の中央から中世の溝S D28が分断しており、全般的な遺存状態は良くない。遺物の出土量は総体的に少ない。

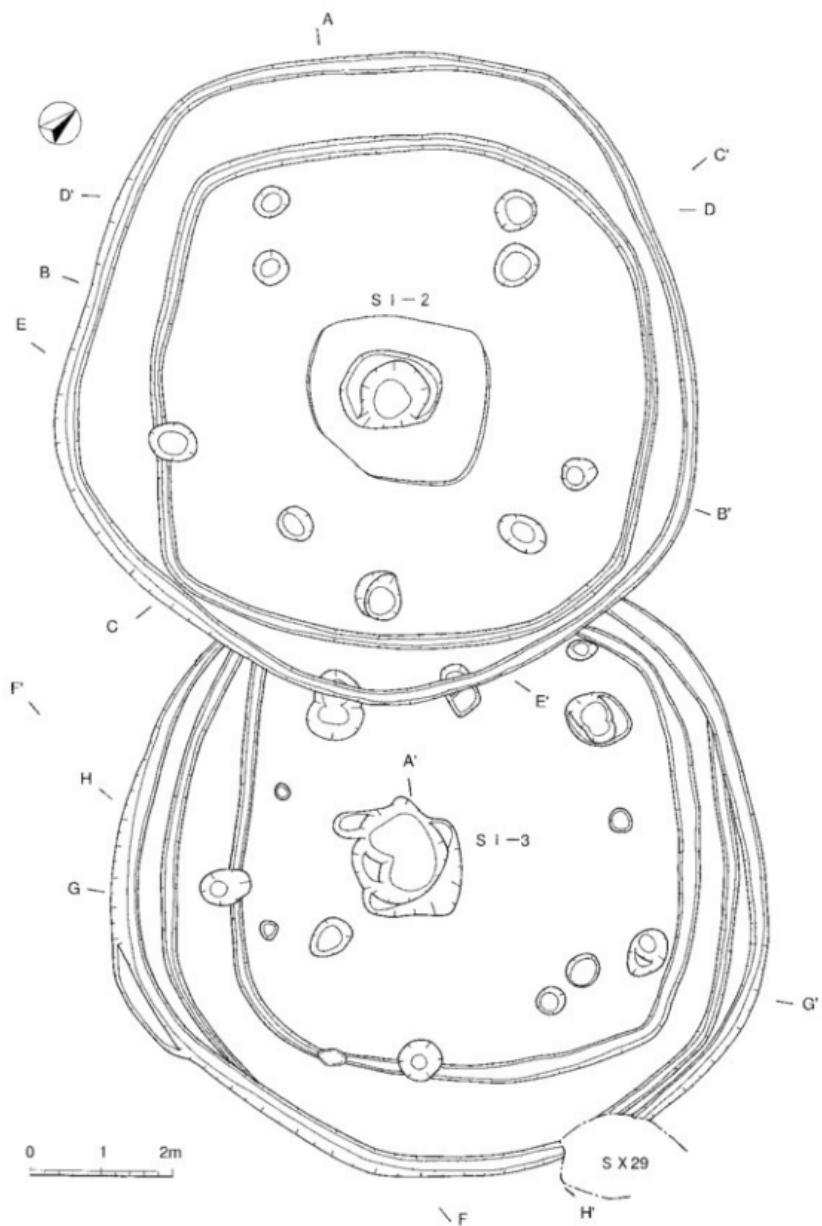
S I - 2 (第8図、第9図)

調査区南西端に位置する。後述するS I - 3とは切り合い関係をもつ。平面形は隅丸方形で、7.1m×7.3mである。検出面からの深さは10cmを測る。柱穴は4本柱で、直径45~70cmの円形及び梢円形を呈する。深さは床面から約50cm前後である。柱穴間は北東~南西側が3.3m、北西~南東側が3.8mで、N44°Eを測る。壁溝は幅15~25cm、深さ床面から4~12cmである。

本壇穴はこの隅丸方形プランよりさらに規模を大きく改修している。プランは角がやや丸みを帯びる五角形で、一辺約5.2m、最大長9.4mを測る。壇穴北東側は削平により掘り方を確認することはできなかった。壁高は遺存部のある箇所から約10cmと浅い。壁溝は幅が20~35cm、床面からの深さは4~13cmである。床面は厚さ3cm程度の黄褐色をした貼床をもち、南西側壁溝の付近では貼床が10cm近くも厚みをもつ。改修前と改修後の貼床面の高さはほぼ同じなため、改修前後どちらの床面にあたるかは不明である。柱穴は5個存在する。歪な円形をしており、直径40~70cm、深さ床面から55~65cmである。土層は柱痕跡と思われる茶褐色粘質土が直立上に堆積し、覆土は石礫を詰め込んだ褐色粘質土である。壇穴の床面直上には炭化物や焼土が認められる。



第7図 S I - 1 実測図 ($S = 1/80$)



第8図 SI-2、SI-3実測図 (S=1/80)

L=13.3m

A

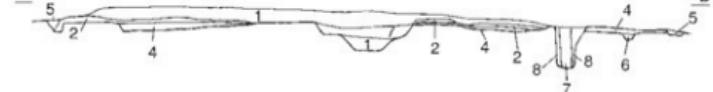
A'



L=13.3m

B

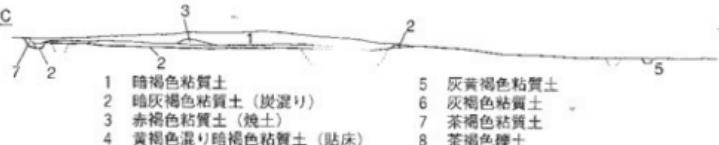
B'



L=13.3m

C

C'



L=13.3m

D

D'

L=13.3m

E

E'

0 1 2m

第9図 S I - 2 土層断面実測図 (S = 1/80)



L=13.3m

G

G'

L=13.3m

H

H'

0 1 2m

第10図 S I - 3 土層断面実測図 (S = 1/80)

堅穴中央から25m四方には約3cmの高まりをもつ。その真ん中には長辺1.4m、短辺1.1mの正方形をした特殊ピットが存在する。床面から15cm下がったところにテラスが通り、さらに20cmの穴を掘り下げた形態をもつ。不定形な形状は改修後に一度掘り直しているからかもしれない。

S 1-3 (第8図、第10図)

調査区南東隅にあり、S 1-2と切り合っている。土層断面からS 1-2と同様隅丸方形プランから五角形へ大型化する。隅丸方形プランは5.5m × 6mで、検出面からの深さは20cmである。柱穴は4本で、円形及び楕円形を呈する。直径40~80cm、深さ床面から約55cm前後で、柱穴と柱穴の間は平均3.5m、N42°Eである。壁溝は幅が15~35cm、床面からの深さ3~10cmである。溝の直上には砥石の石9(第35図)を検出した。

改修後の大型五角形プランは一辺約5.5m、最大長9.3mの規模をもつ。東南隅の一部はS X 29により滅失している。遺存部のある地点からの壁高は約20cmである。壁溝は幅が15~40cm、深さ床面から5cm程度である。溝は東西両面で二重になることから五角形プランの段階でもう一度改修があったと思われる。柱穴は5個確認できた。直径50~70cm、深さ50~60cmで、うち2個は隅丸方形プランの柱穴と切り合っている。柱穴と柱穴の間には直径10~30cm、深さ床面から15~30cmの小ピットがあり、支柱穴と考えられる。土層は褐色粘質土が全般にわたって埋まり、その上に暗褐色粘質土が薄く堆積する。

堅穴の中央よりやや南東寄りには土坑が存在し、特殊ピットと考えられる。形は複数の穴が錯綜している状態で、4箇所のテラスをもち、下場は2基の穴が接合する形をしている。長辺1.8m、短辺1.5m、深さ床面から35cmを測る。S 1-2と同様、堅穴改修後も特殊ピットの位置は変えず、掘り直したと考えられる。

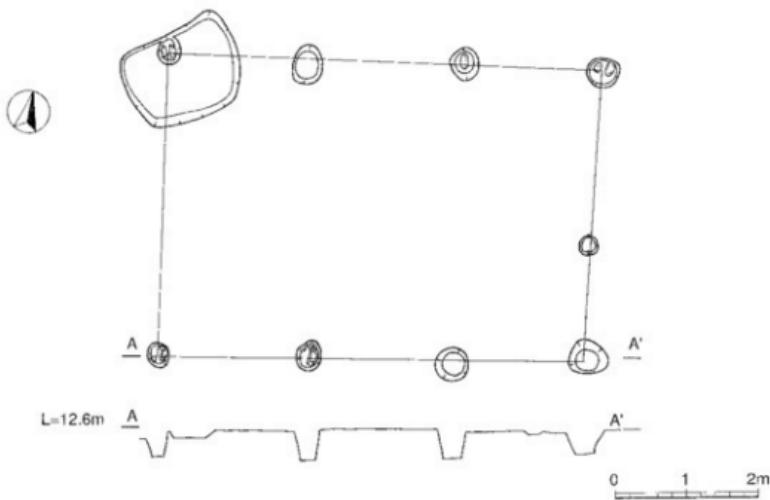
第2節 堀立柱建物跡

S B-1 (第11図)

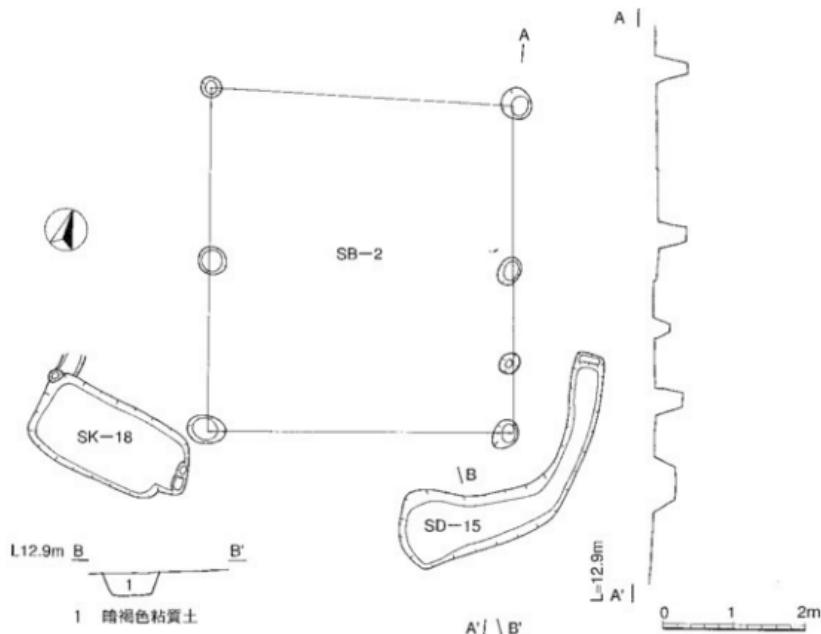
調査区中央のやや北寄りに位置する主軸をN-83°-Eをもつ東西方向の建物である。東西6.0m・南北4.2mの3間×1間の規模をもつ。桁行の1間分の長さは約2mである。柱穴は直径30~50cmの円形及び楕円形をし、深さ30~45cmを測る。東側の梁間には直径25cm、深さ5cmのピットが1個検出されており、支柱穴の可能性をもつ。堆積土は褐色粘質土の単層で、埋土の中には直径20cmの自然石を含むものもある。

S B-2 (第12図)

調査区中央西端に位置し北西-南東方向をもつ。主軸はN-23°-Wで、長軸4.8m・短軸4.3mの2間×1間の大きさをもつ。柱穴は直径30~55cmの円形で深さ35~50cmを測る。東方桁行側には支柱穴と思われる直径30cm・深さ24cmの円形をしたピットが1個存在する。堆積土は褐色粘質



第11図 SB1実測図 ($S = 1/80$)



第12図 SB2、SD15、SK18実測図 ($S = 1/80$)

土の单層である。後述する S D 15は S B - 2 の周間をまわる状態で見つかっており、同時期に併存したと考えられる。

第3節 土坑、溝、その他

本節ではまとまった遺物が出上するなど特定の造構を抽出して説明する。

S K - 9 (第13図)

S I - 1 の南東にある土坑で、西端は調査区外へのびる。長軸推定約120cm、短軸約100cm、深さ約35cmの隅丸長方形をしている。覆土は1層のみで暗褐色粘質土である。地山面から約20cm掘ったところで弥生土器90、91が出土している。

S D - 10 (第13図)

幅約35cm前後、深さ7~19cmの溝である。円周状に巡ると思われるが、西半は調査区外のため様相はわからない。円周内の直径は約3.2mで、直径20cm前後のピットが3個存在する。覆土は褐色粘質土1層からなり、遺物は発見できなかった。S K 9やS K 17と切り合っているが前後関係はよくわからない。なお、本遺跡から東南約1km離れたところにある弥生時代後期の高橋セボネ遺跡や西北約2km進んだところにある弥生時代終末期の御経塚ツカダ遺跡からも周溝状造構を確認している。

S D - 15 (第12図)

S B - 2 の東南にある溝で、建物を巡るような逆し字状となる。断面形は逆台形の形状をとり、覆土は暗褐色粘質土のみの1層である。南北ラインは幅が狭く東西ラインに向きが変わると袋状に膨らむ。溝幅は短いところで35cm、長いところで110cmを測る。深さは24~35cmで、北端が浅く、西端の袋状の箇所が最も深い。

S K - 17 (第13図)

調査区西端に位置する土坑で、S D - 10と接する。長辺200cm、短辺90~130cmで帯な楕円形をしており、2つの土坑が切り合った可能性もある。深さは40~44cmを測り、内部の中央から西側にかけて115、116の桶型土器が底から20cm程掘った所で出土した。検出した土器は破片が多く、出土状況から廃棄したものと考えられる。

S K - 18 (第12図)

S B - 2 の南西にある土坑である。長辺238cm、短辺118cmの長方形で、東端は出っ張りをもち小ピットが見られる。深さは15cm程度と浅いが、土器が定量出土している。

SD-20 (第14図)

S I - 2 の北西にある北東一南西ラインの溝である。幅は104~140cmと広く、弱い蛇行をしながら、西側調査区の外へのびていく。深さは15~27cmと浅く、中から直径25~40cmのピットが2個確認した。覆土は暗褐色粘質土で、弥生土器の破片が出土した。

SK-21 (第15図)

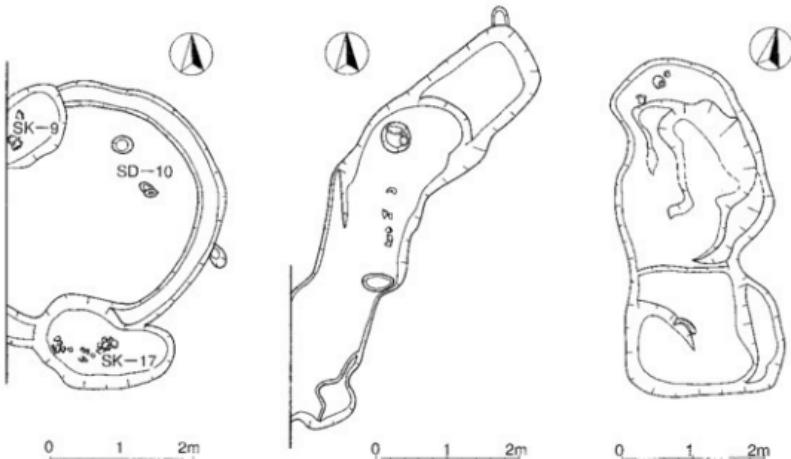
S I - 3 の北隣に位置する。南北に細長く、内部はテラスがいくつも形成され、数基の土坑が錯綜しているかもしれない。南北間の最大長は480cm、東西間の最大長は230cm、最大深は地表面から35cmを測る。土坑内からは大量の土器が出土し、暗褐色粘質土の覆土をした上層面に集中した。

SD-28 (第16図)

調査区中央を北西一南東間で横断する溝である。幅220~350cm、深さは30cmである。堆積層は砂礫が多く層序が複数存在することから當時水流を保ち、流路が少しづつ変わりながら流れていったようである。最下層から194の珠洲焼甌が見つかっている。

S X-29 (第8図)

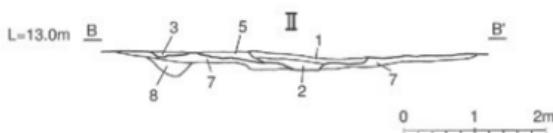
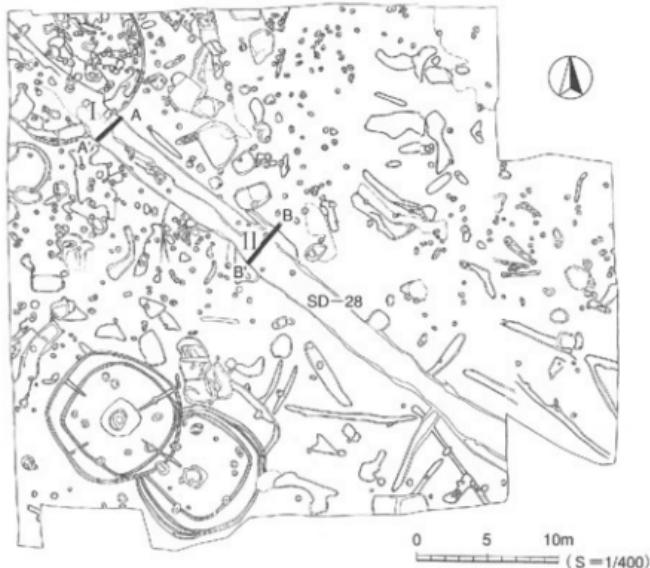
S I - 3 の東隣に位置する。長辺220cm、短辺120cmの規模をもち、人頭大の自然石が集中している。18世紀後半の195灰釉皿及び196の小型甌が1点見つかっている。このように石が集中



第13図 SK9、SD10、SK17実測図 (S=1/80) 第14図 SD20実測図 (S=1/80)

第15図 SK21実測図 (S=1/80)

する箇所は調査区内でいくつか確認することができる。形状は不定形で規格性はもたない。第10図のS I - 3 土層断面図にこれらと同じ自然石が大量に埋まっている層を確認することができた。(第10図土層 9) 近世から昭和初期の間の層序となる灰黄色粘質土から掘りこまれており、上辺160cm、底辺100cm、深さ40cmを測る。本遺跡の周辺は自然河川の影響で川原石が散在しており、周辺を耕作地に利用する箇所でも石は大量に拾われたと思われる。S X29を含むこれらの穴は耕作地に不必要的石を埋めた跡と考えられる。



- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1 灰橙色砂土 (直径2~5cm小礫混る。) | 5 灰褐色粘質土 |
| 2 灰橙褐色砂土 (直径2~5cm小礫混る。) | 6 淡灰橙色砂土 |
| 3 暗褐色砂土 | 7 黒灰色粘質土 (包含層土) |
| 4 灰褐色砂土 | 8 灰黄色粘質土 |

第16図 SD28土層断面実測図 (S = 1/80)

第5章 遺 物

第1節 土器、陶磁器、土製品

器種や法量、色調などは後述の観察表を参照いただき、本節では観察表に記載していない事項を中心に報告する。

6は壺の頭部で、被熱を受け胎土の状態がよくない。7は小型高坏の坏部で、剥離が目立つ。9～25は壺である。17は口径37cmを測る大型の壺である。体部の一部が見つからない他はほぼ完全に復元でき、S I 2のはば中央から一括で出土した。内面底部はミガキ調整で、内面体部の一部には黒斑が見られる。18は口縁に擬凹線をもたない中型の壺である。口縁部から体部中央にかけて煤が付着する。頭部に付着している煤から吹きこぼれの痕跡が一部見られる。体部下半は被熱を受けている。全般的に遺存状態は良いので、使用頻度の少ないうちに廃棄したと思われる。23は擬凹線をもった大型の壺で、内外面の一部に煤を見る能够である。24は23の壺の底部にある。26～28は底部である。27は外底面までススが付着するのに對して、28は被熱を受けた痕跡はあるもののススは見られない。31は広口直口壺、32は有段口縁を有する壺で、こちらも外面口縁部にススが付着している。43は小型の鉢形上器で体部下半は黒く焦げている。45～52は擬凹線をもった壺である。45は大型の有段口縁壺で全体に被熱を帯び剥離が目立つ。47と48は外面口縁部に、49は外面口縁端部から体部全般にかけてススが付着している。51は口縁部から体部全般にススが付着するだけでなく、被熱のため体部の一部が剥離している。61～63は高坏の坏部である。61の高坏は口縁端部に黒斑が見られる。64は装飾器台であるが、遺存率は極めて低い。66は有孔鉢である。外面口縁部から体部上半にかけては剥離が著しい。内面はミガキ調整であるが、口縁端部から3cmにかけて摩耗している。73の脚部の内面端部にはススが見られる。74は器台の垂下部にあたる。外面最下部に刻印文を入れている。75～79は壺である。75は口径21cmの大型品で、比熱により摩耗している。76も比熱による剥離が目立つ。83は有段口縁をもった壺である。外面にススが付く。84は小型高坏の脚部と思われる。87は壺と思われる底部で外面全体に赤彩を施すが、地面上に設置する外底面は剥げている。95の壺は被熱による剥離が激しく、ススが少量付着する。97は体部が袋状となる壺の口縁部である。98は高坏の脚部である。3条の沈線の上に刻み日文で加飾している。99は壺の台付き底部で、全般にミガキを施す。101～104は口径17～20cm、擬凹線をもった有段口縁壺で、器形・法量ともにはば同じ大きさをもつ。110は有段口縁壺の口縁部で一部剥離している。112は高坏の坏部で小型の部類にはいる。内面は黒光りする。115は116の壺とセットになる内外面に赤彩をもった桶形上器である。115、116それぞれ両側に紐を通すための突起物がついている。金沢市北部に位置する弥生後期後半の集落跡である西念・南新保遺跡からこれらと酷似した木製品が出土している。115・116はこの木製品を模倣した土器で、祭祀に使用したと考えられる。115は内外面全体がミガキで調整され、赤彩を入れた丁寧な成形をして

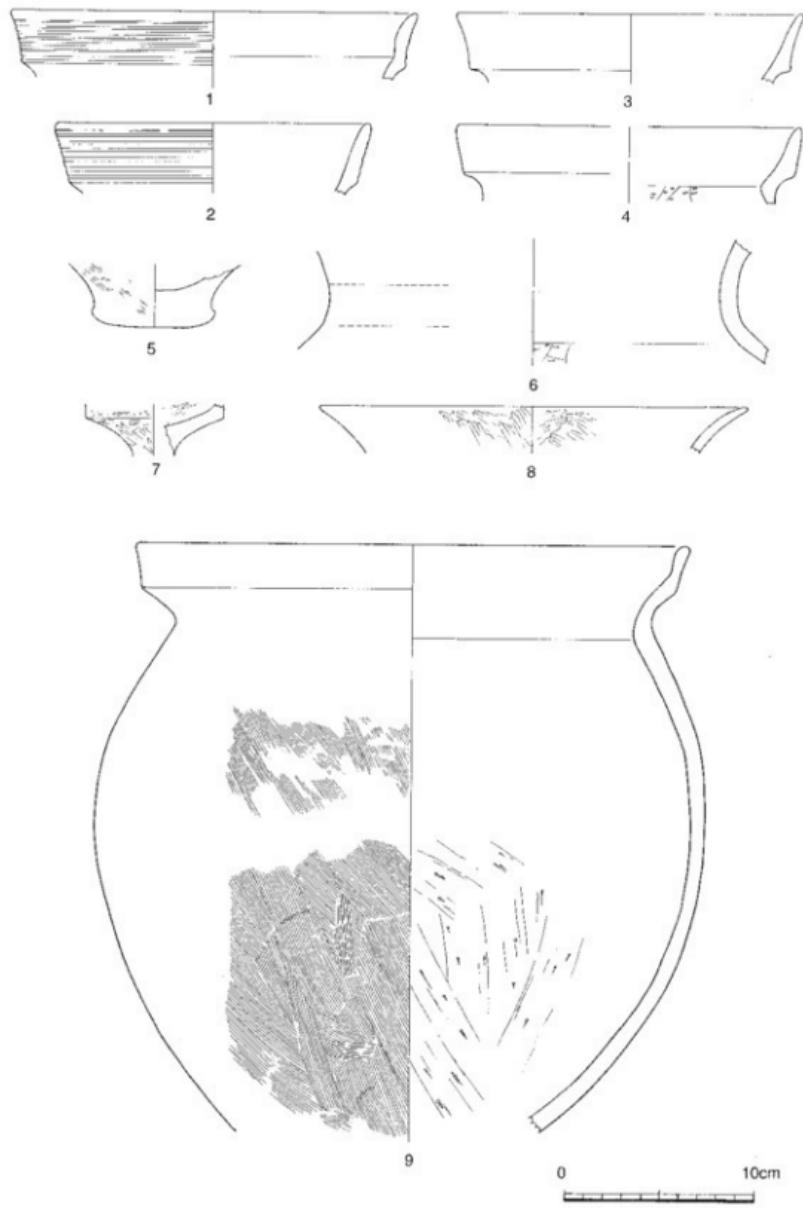
いる。口縁端部は116の蓋と接合するため赤彩は剥がれています。115の紐を通す突起物は片側が外れてなくなっている。外れている箇所を観察すると、縦状に細かい線をいくつも入れており、突起物は桶の形がつくられた後に接合したことがわかった。116も115と同様内外面に赤彩を施した丁寧なつくり方をしているが、115と接する端部は傷みが目立つ。136は小型の有段口縁壺で、口縁部から体部上半にかけて二次的加熱等による剥離やススが見られる。142は口縁端部に刻み状のものをもつ小型壺である。143は長頸壺の口縁部で摩耗が著しい。152の高壺は比熱を受けた痕跡があり、ススが付着している。158は装飾器台の体部片である。163は口径32cmをもつ大型の壺である。口縁端部は剥離が目立つ。167は小型の蓋で、輝石もしくは角閃石が多量に入っている。168は細かい擬円線をもつた有段口縁の壺で外面体部上半にモミ圧痕が見られる。176、177是有段口縁壺である。176は口径25cmの大型壺で、内外面に赤彩痕が残る。179、180は装飾器台である。179は外面に鮮やかな赤彩が付着する。184は外面に赤彩を施す蓋で、上部には粘土を貼り付けた痕跡を残す。

187～189は弥生時代中期前半のいわゆる柴山出村式上器である。いずれも小片で詳細は不明であるが、3点とも壺にあたると思われる。

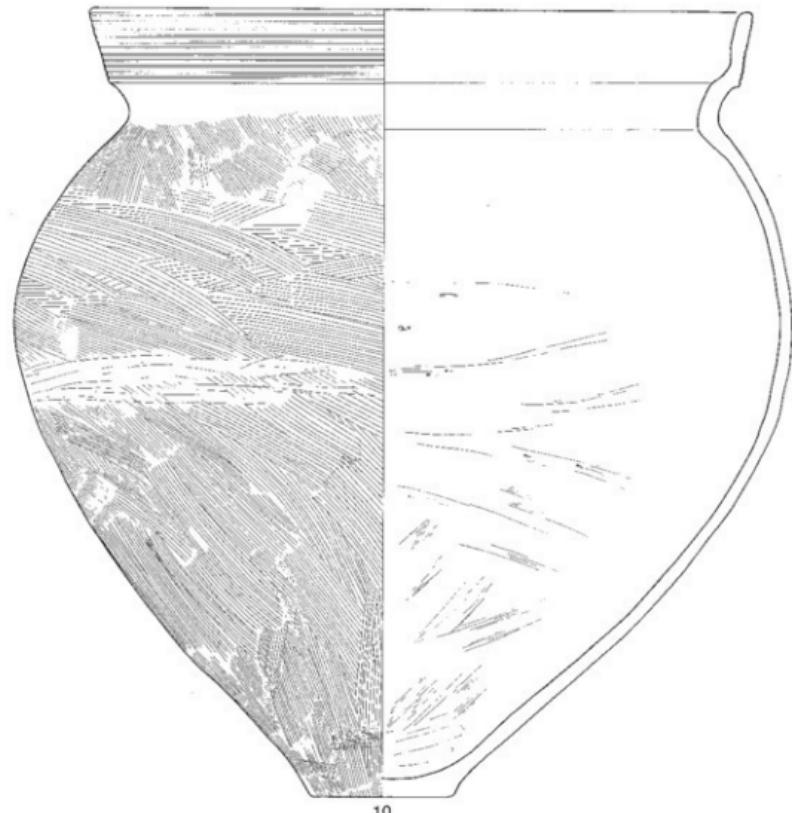
190と191は須恵器である。190は南加賀産の有台杯で、191は蓋と思われる破片である。いずれも時期は8世紀前葉である。192～194はSD28からの出土である。192は瀬戸灰釉碗である。口縁端部の釉薬は剥がれている。193は全般的に摩耗した瀬戸天目茶碗底部にあたる。両者とも14世紀後葉～15世紀前半に位置づけられる。194は珠洲焼壺の破片である。口縁端部は短く面取りする。14世紀前半と思われる。195と196は近世の所産である。197と198は土鉢である。197は柱状形をし古代に位置づけられる。198は球形しており、弥生時代に見られるタイプである。

第2節 石製品等

1～6は打製石斧である。1は完形品で基部は弧を描き、刀部は外湾する。2も基部から刀部まで残っているが、正面の調整に未完成の箇所が見えるため未製品と考えられる。3も完形品である。基部は直基、刀部はやや斜めに走る直刀で未使用品と思われる。4～6は基部のみ残る。使用時に折れたものであろう。7はSD28から出土した砾石の破片である。四角柱状の形をしており、研面にはなだらかな凹凸がある。9はSI-3の改修前周溝面上から出土した砾石である。自然石を利用しており、研面上には直径2cmの窪みをもつ。10は緑色凝灰岩で玉作りの形割段階のものである。ある。11は鉄石英で、二次調整による剥片である。12はSI-2付近の地山直上から発見された管玉未製品である。穿孔は2回行われている。形状は短く太い。13はSI-2から出土したガラス状の破片である。コバルトブルーの色調をし湾曲する形をする。



第17図 出土土器実測図 (S=1/3) 1~8 (S I-1), 9 (S I-2)



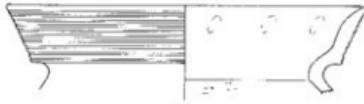
10



11



14



12



15

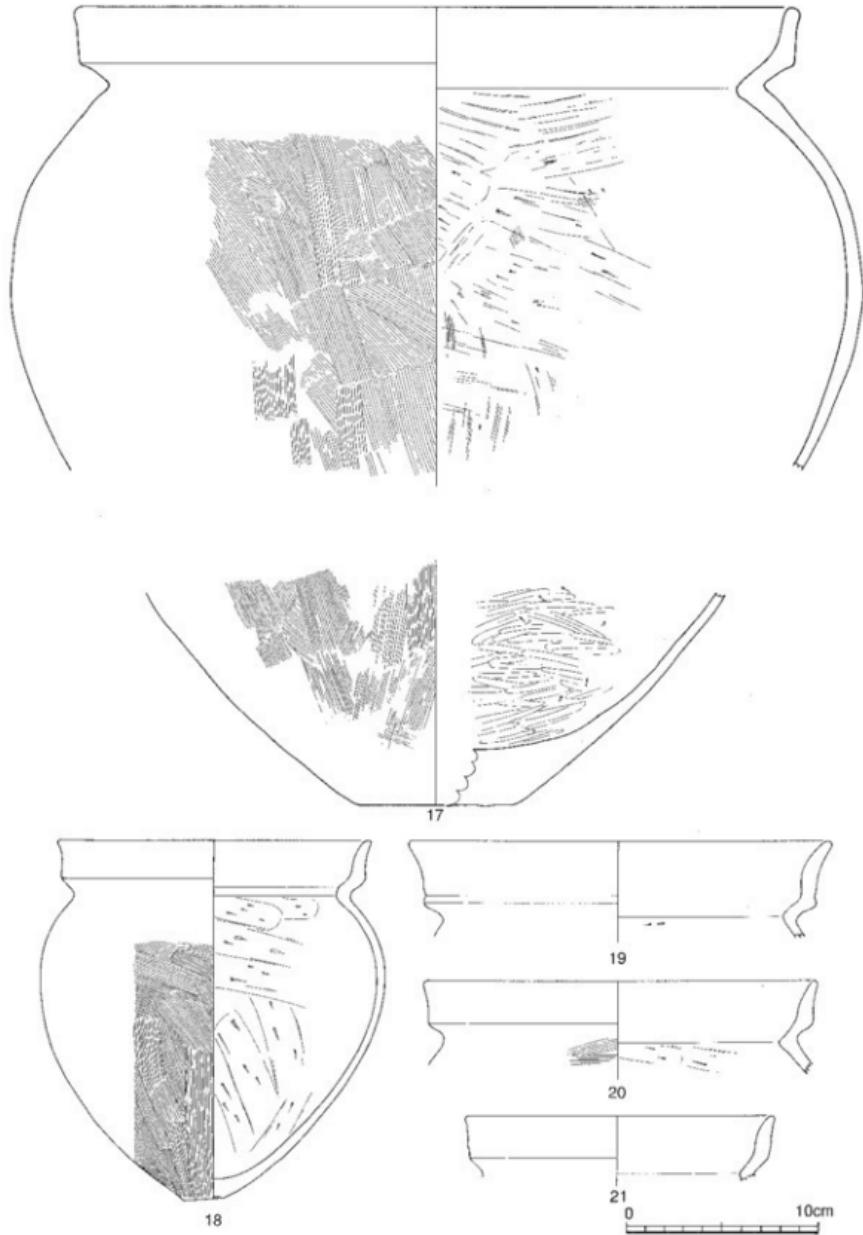


13

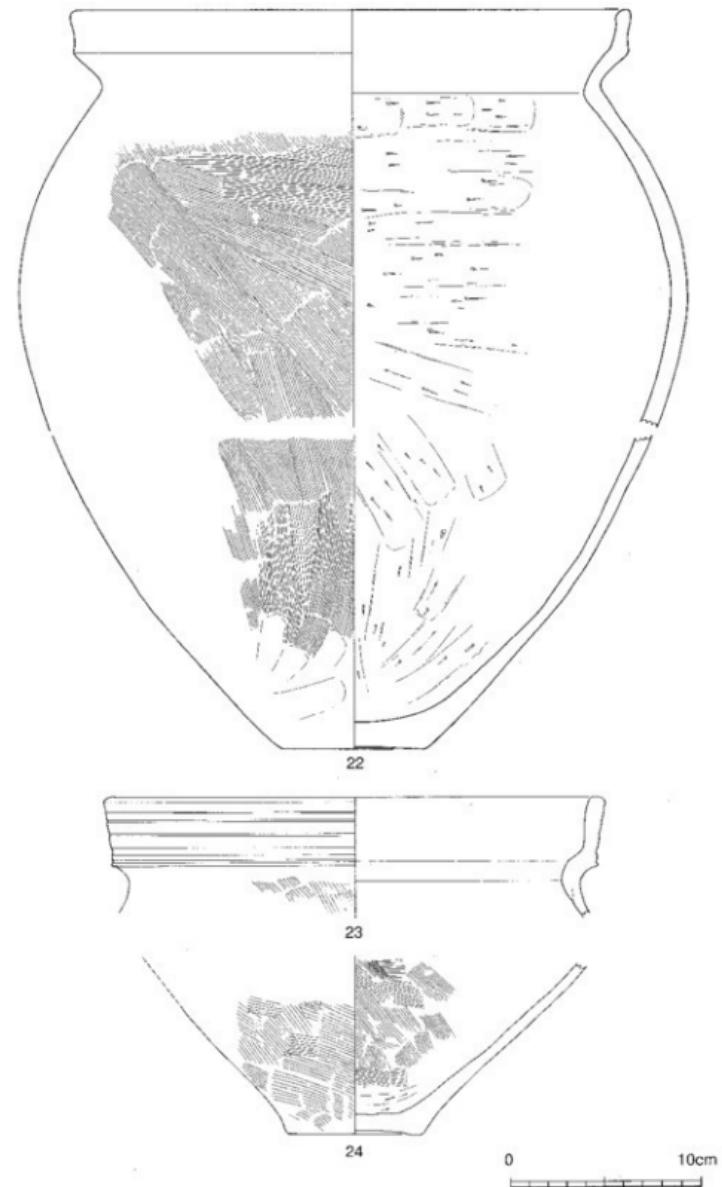


0 10cm 16

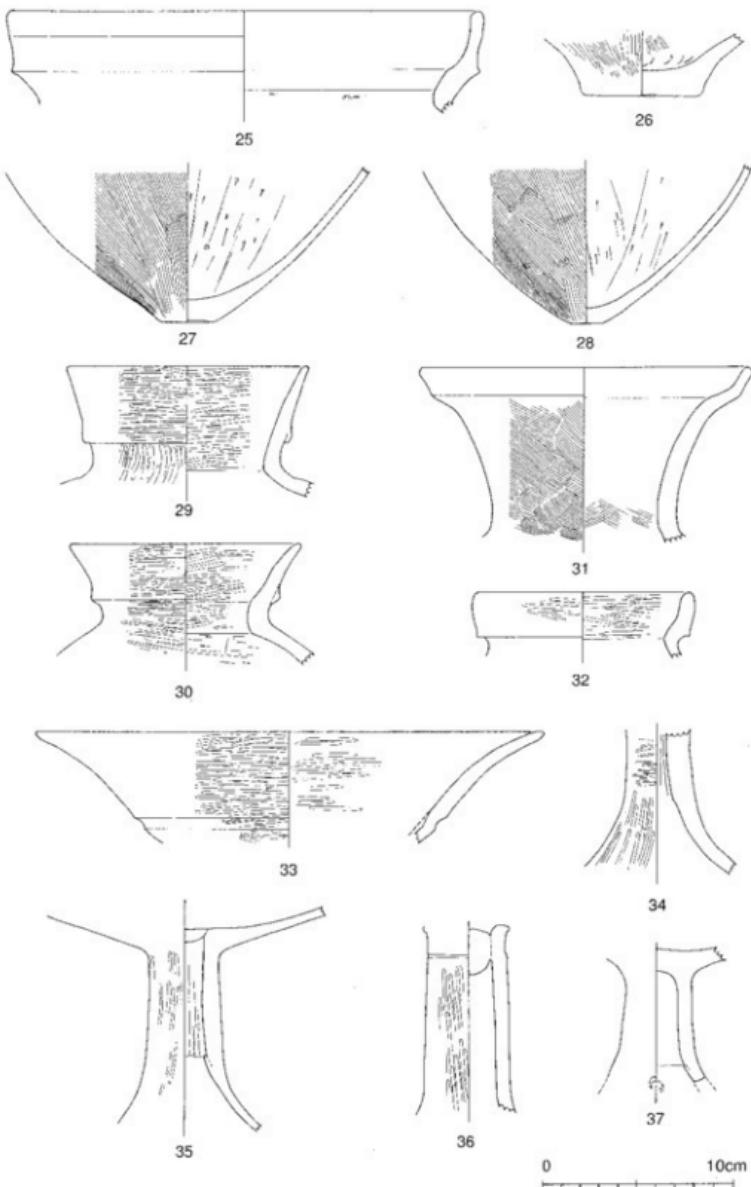
第18図 出土土器実測図 (S=1/3) 10~16 (S I - 2)



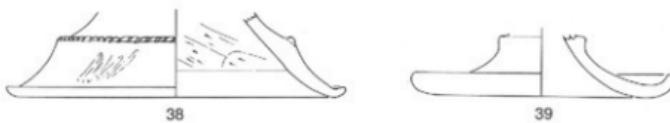
第19図 出土土器実測図 ($S=1/3$) 17~21 (S 1-2)



第20図 出土土器実測図 (S=1/3) 22~24 (S I-2)

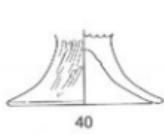


第21図 出土土器実測図 (S = 1/3) 25~37 (S I - 2)

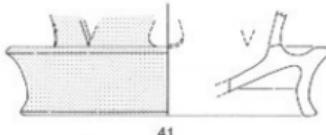


38

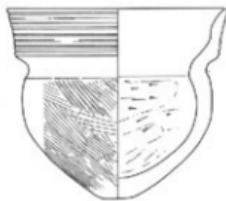
39



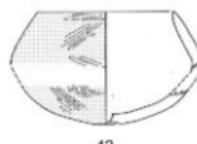
40



41



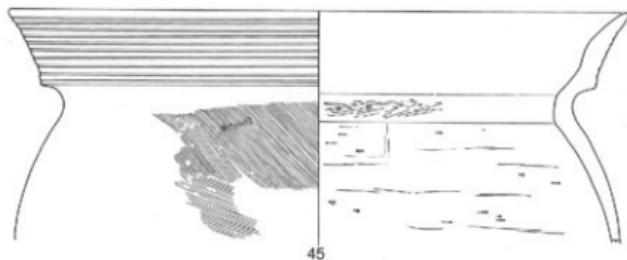
42



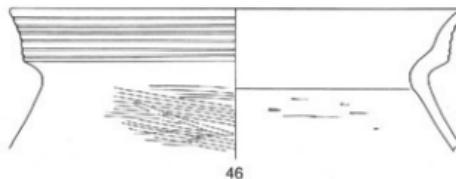
43



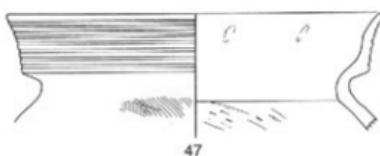
44



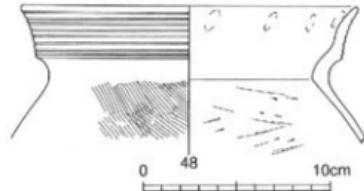
45



46



47

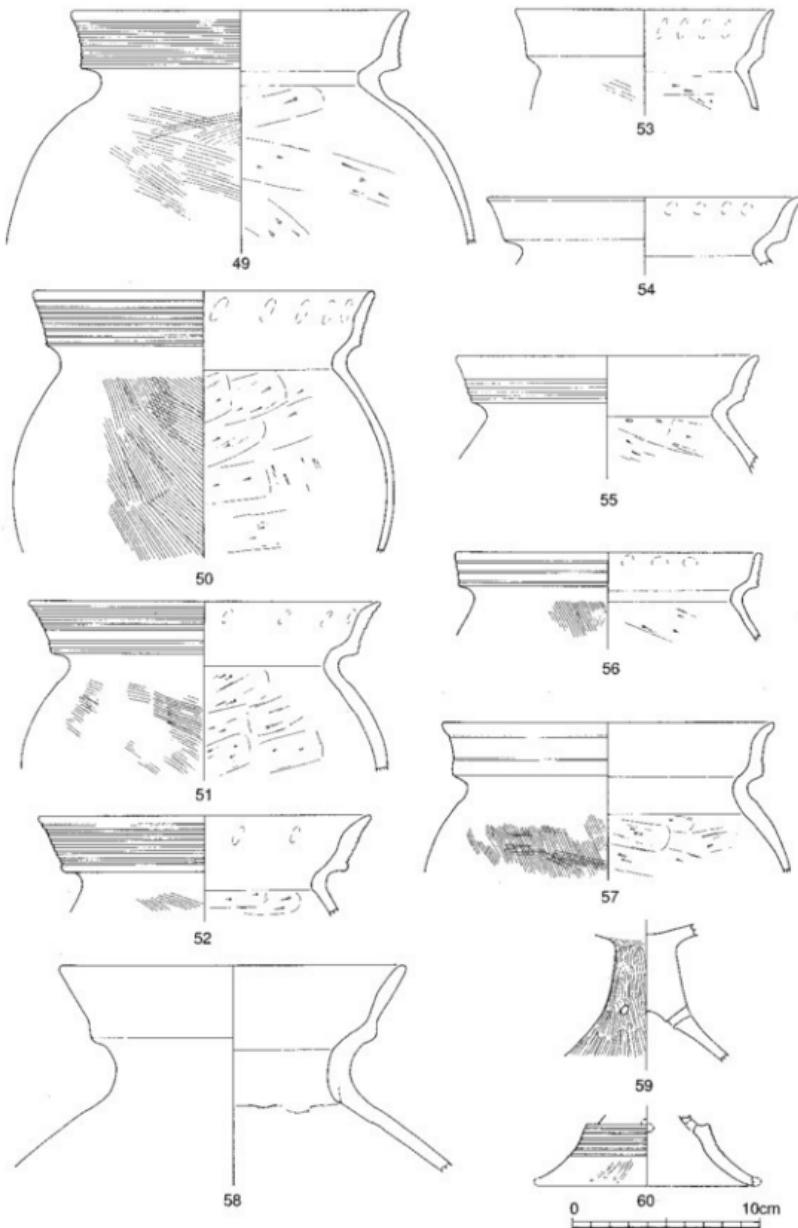


0

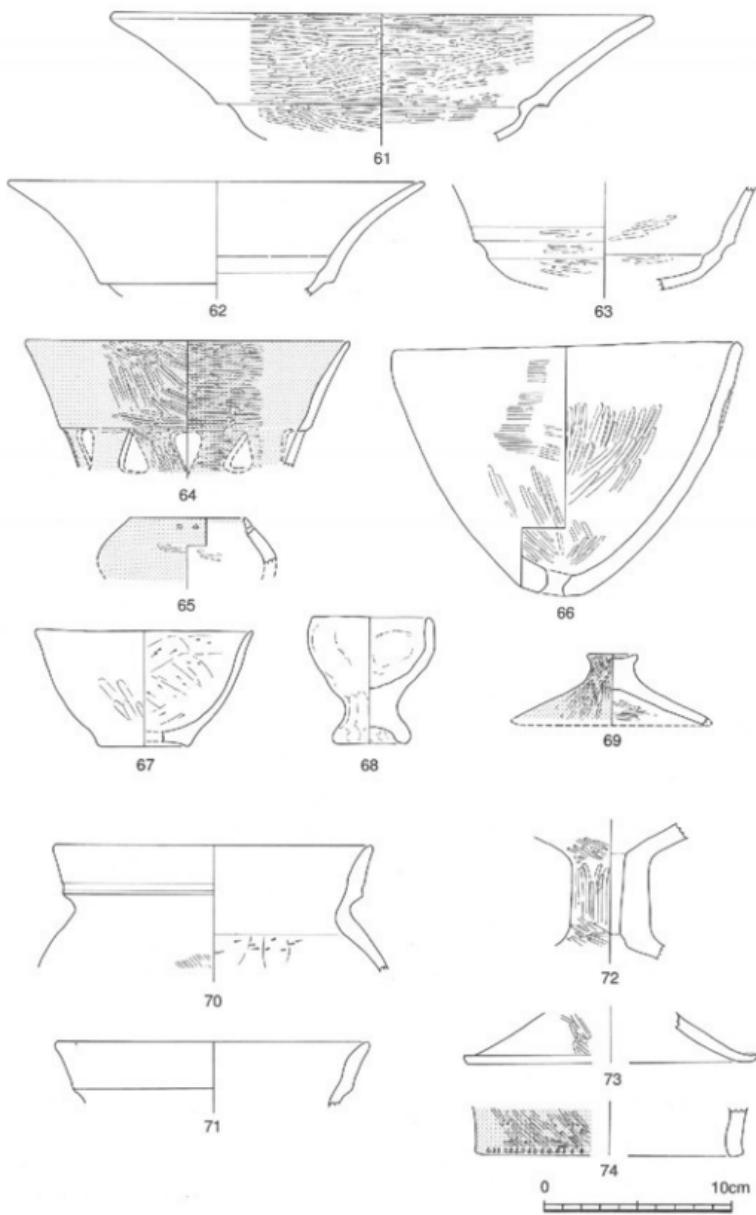
48

10cm

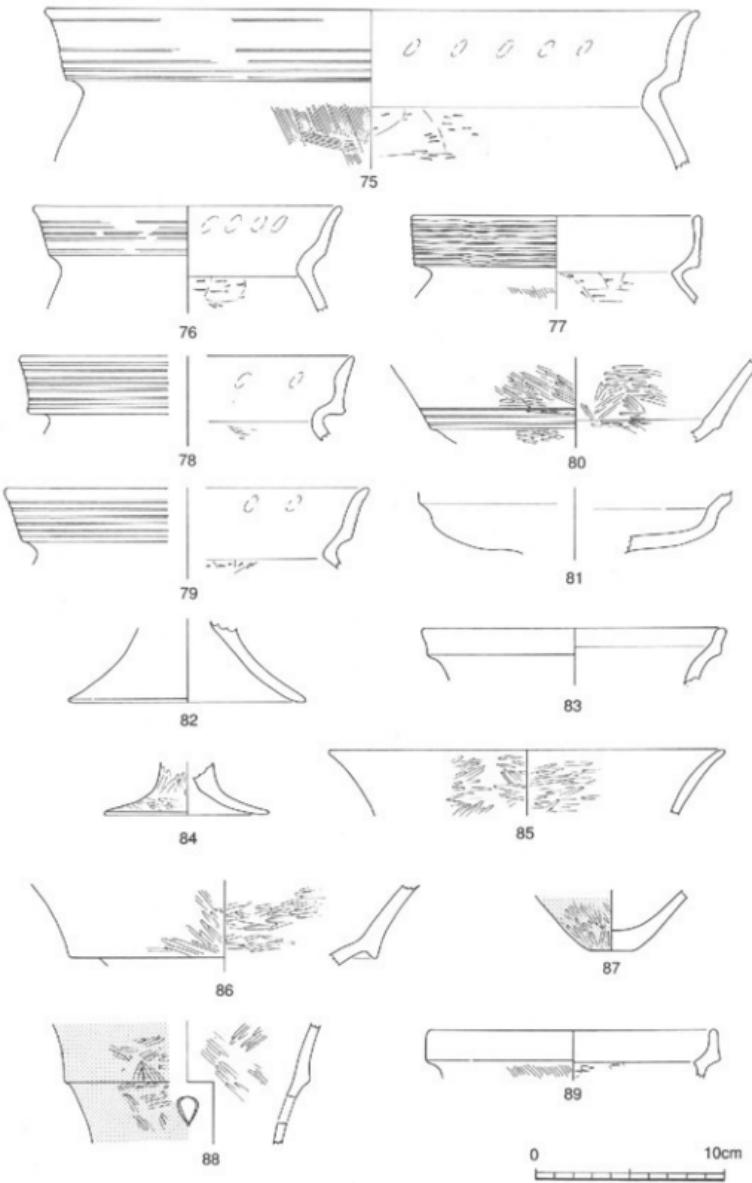
第22図 出土土器実測図 ($S = 1/3$) 38~44 (S I - 2)、45~48 (S I - 3)



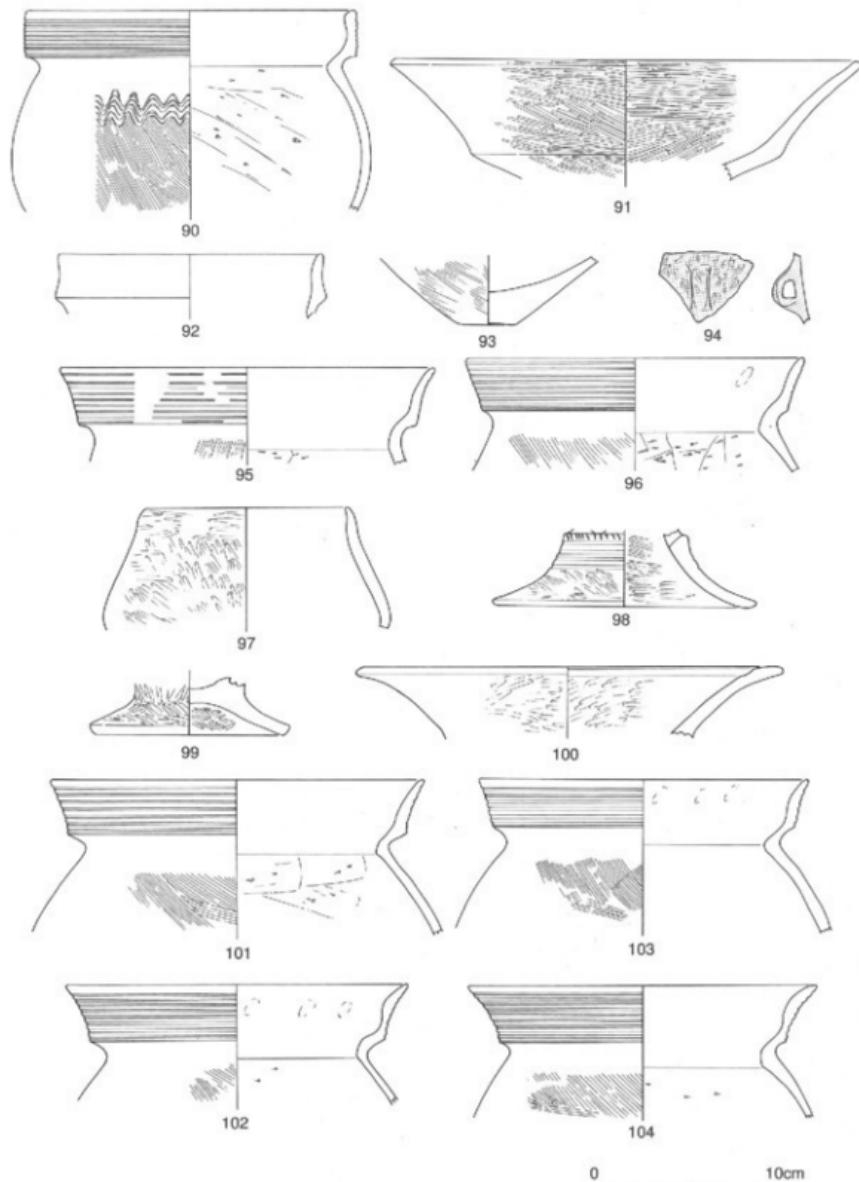
第23図 出土土器実測図 ($S = 1/3$) 49~60 (S I - 3)



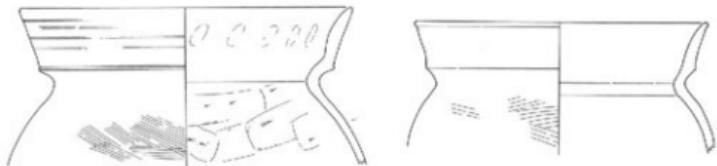
第24回 出土土器実測図 ($S = 1/3$) 61~69 (S I - 3)、70~74 (S K 1)



第25図 出土器実測図 (S=1/3) 75~76 (SK 2)、77 (SK 3)、78~82 (SK 4)、
83 (P 5)、84 (SK 6)、85~88 (SK 7)、89 (P 8)



第26図 出土土器実測図 (S=1/3) 90~91 (SK 9)、92 (SK 11)、93 (SK 12)、94 (P 13)、
95 (SK 14)、96~99 (SD 15)、100 (SK 16)、101~104 (SK 17)



105

106



107



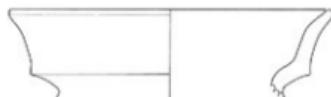
108



109



111



110



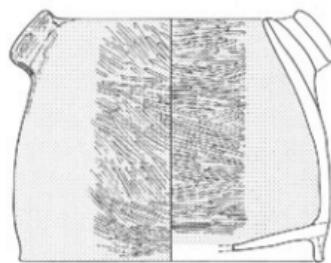
112



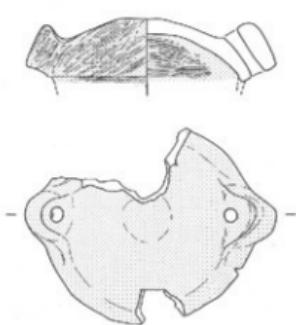
113



114



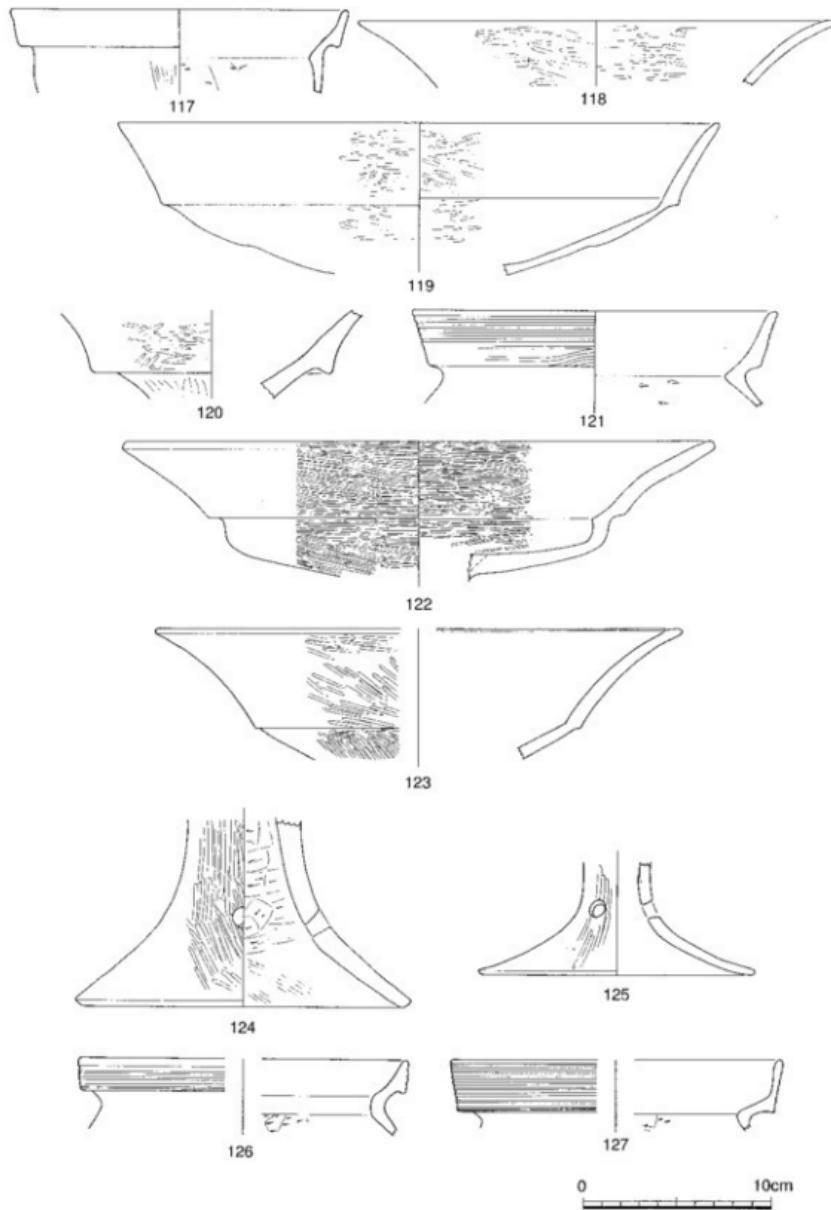
115



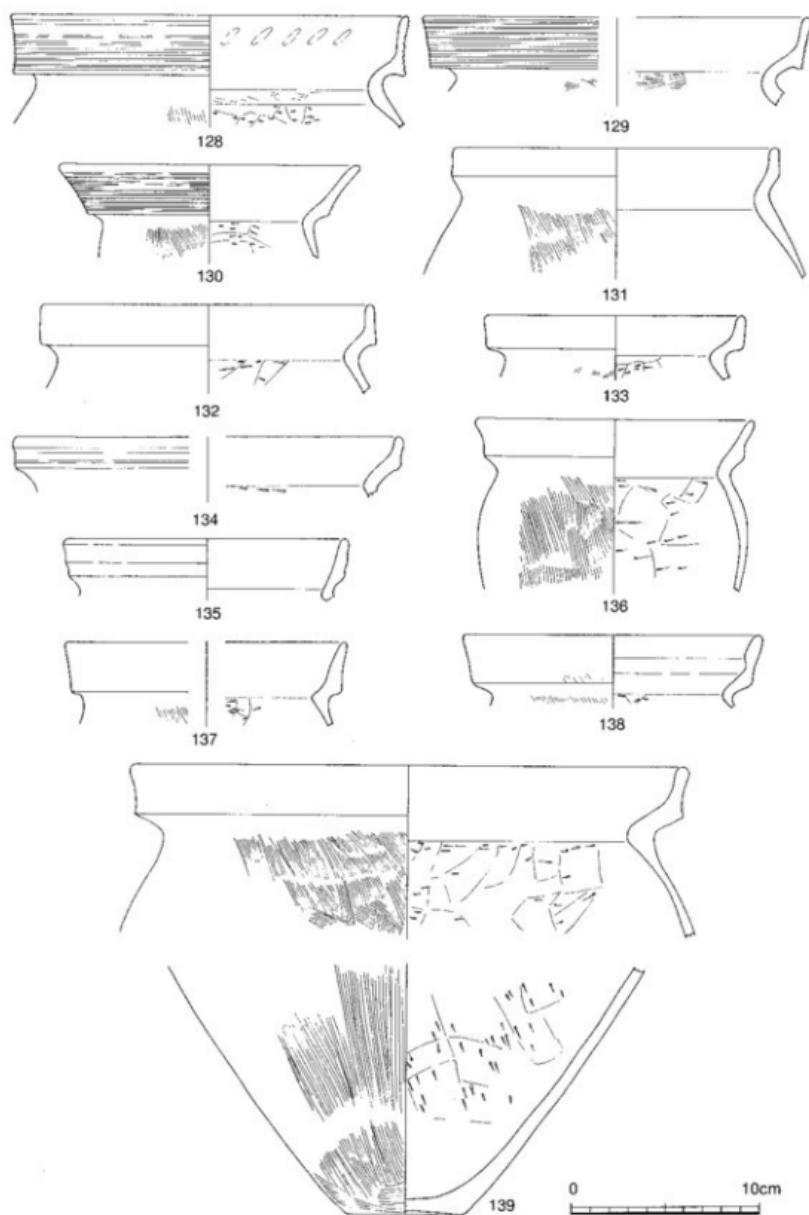
116



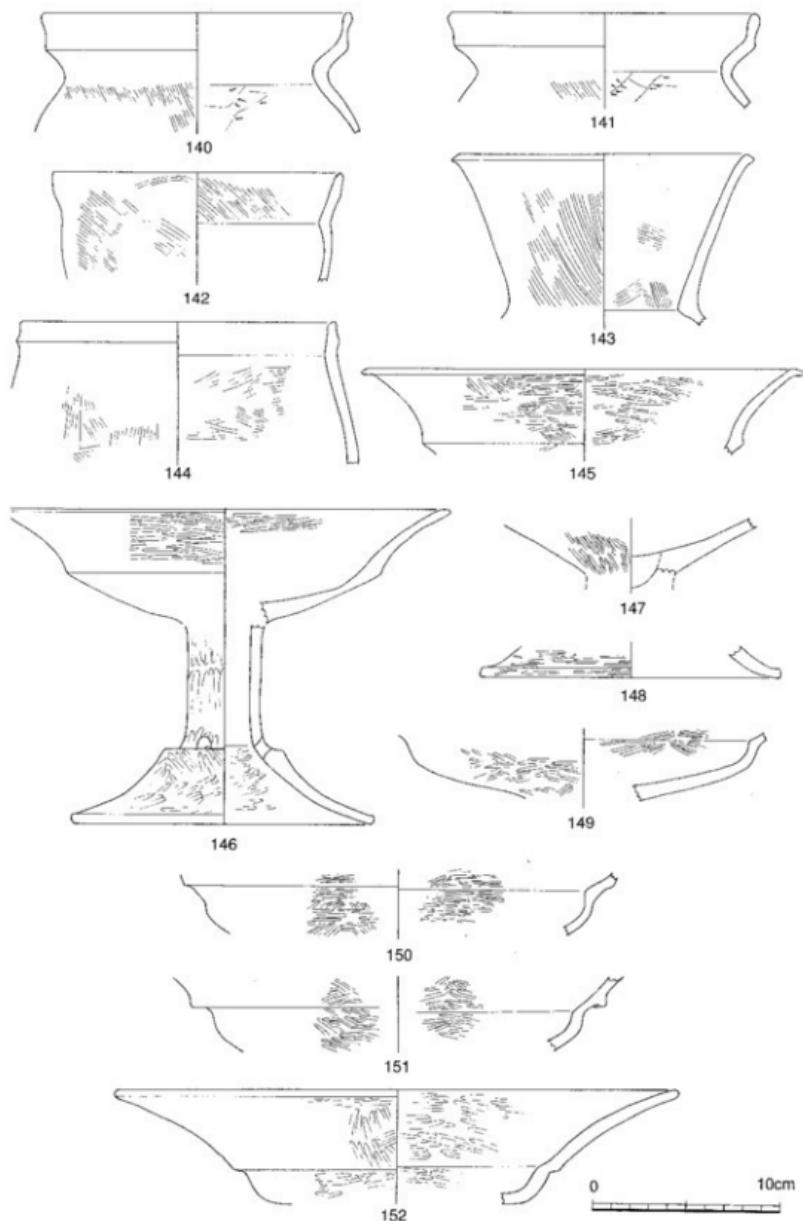
第27図 出土土器実測図 (S=1/3) 105~116 (SK 17)



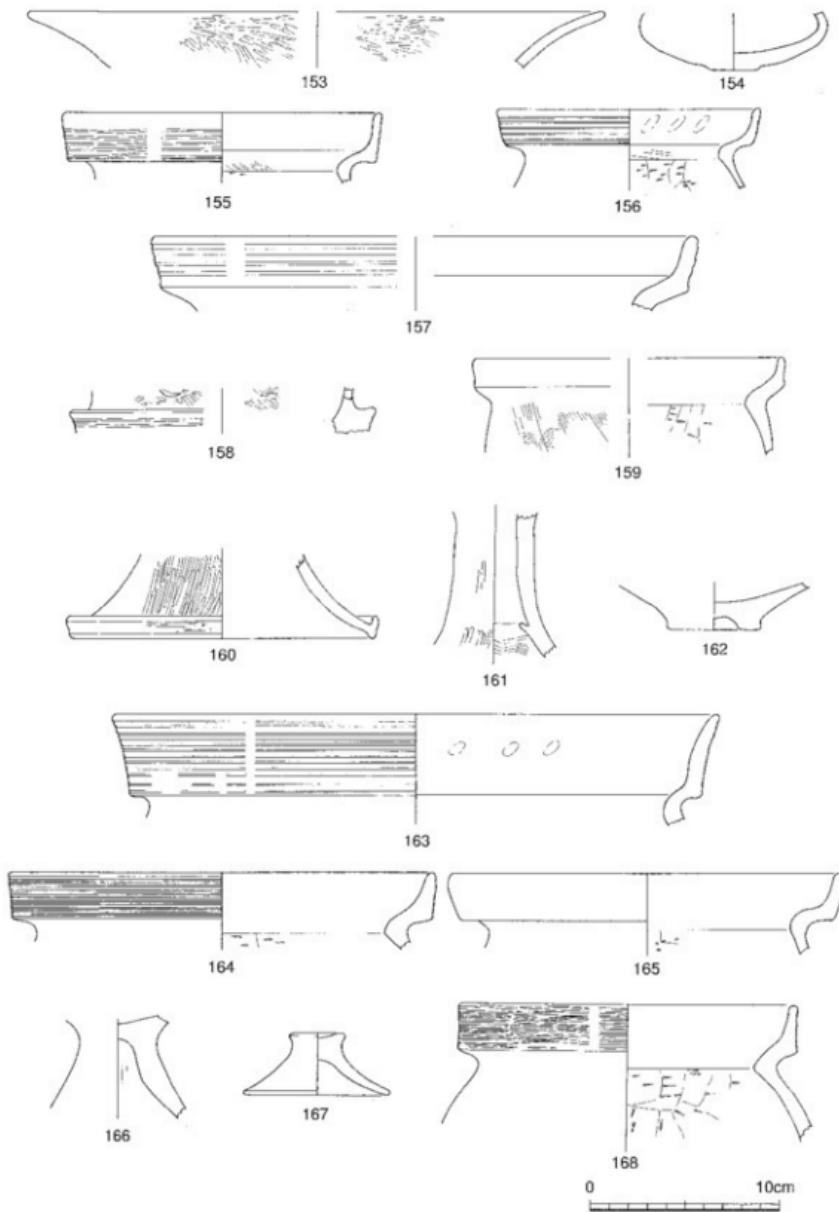
第28図 出土土器実測図 (S=1/3) 117~119 (SK18)、120 (SK19)、121~125 (SD20)、
126~127 (SK21)



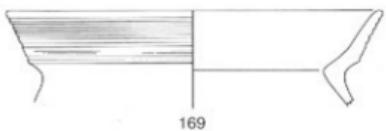
第29図 出土土器実測図 ($S = 1/3$) 128~139 (S K21)



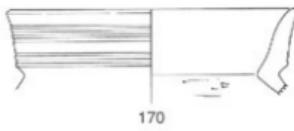
第29図 出土土器実測図 ($S = 1/3$) 140~152 (S K21)



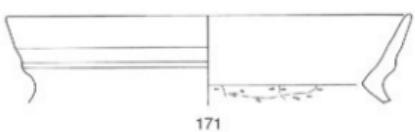
第31図 出土土器実測図 (S=1/3) 153 (S K21)、154 (S K22)、155~157 (S D23)、
158 (S D24)、159 (S K25)、160 (P26)、161 (P27)、162~167 (S D28)、168 (S X29)



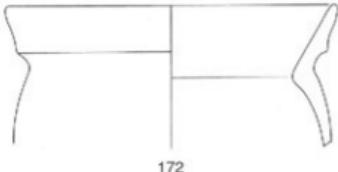
169



170



171



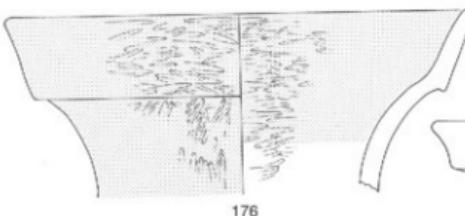
172



173



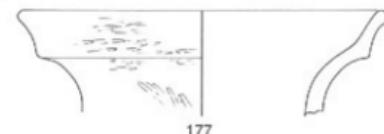
174



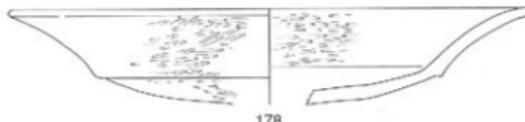
175



176



177



178



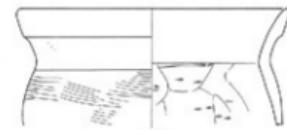
179



180



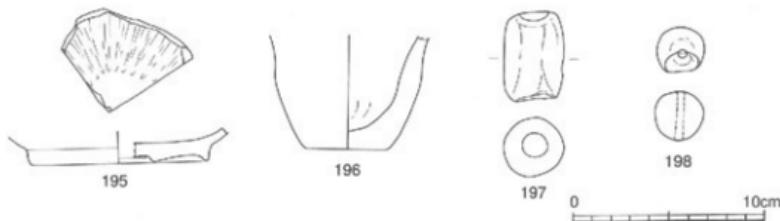
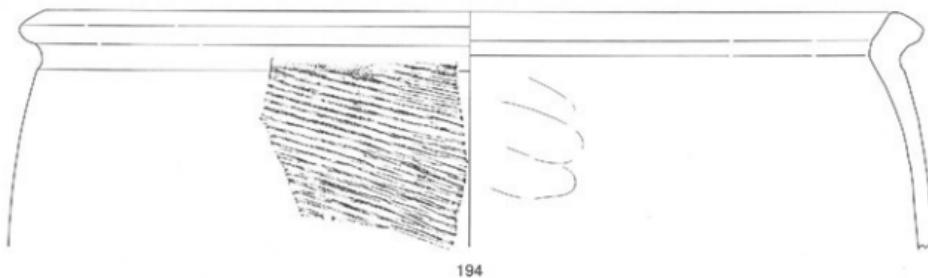
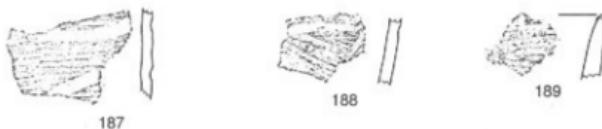
181



182

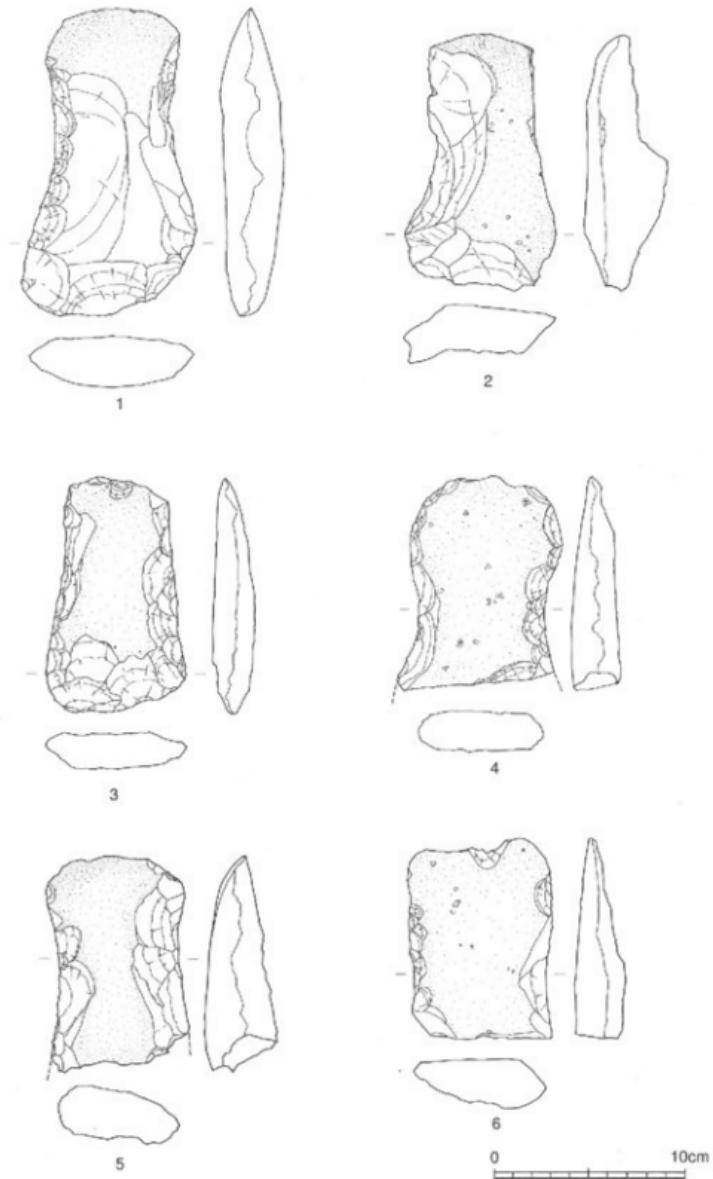
0 10cm

第32図 出土土器実測図 ($S=1/3$) 169~180 (包含層)、181~182 (壁面)

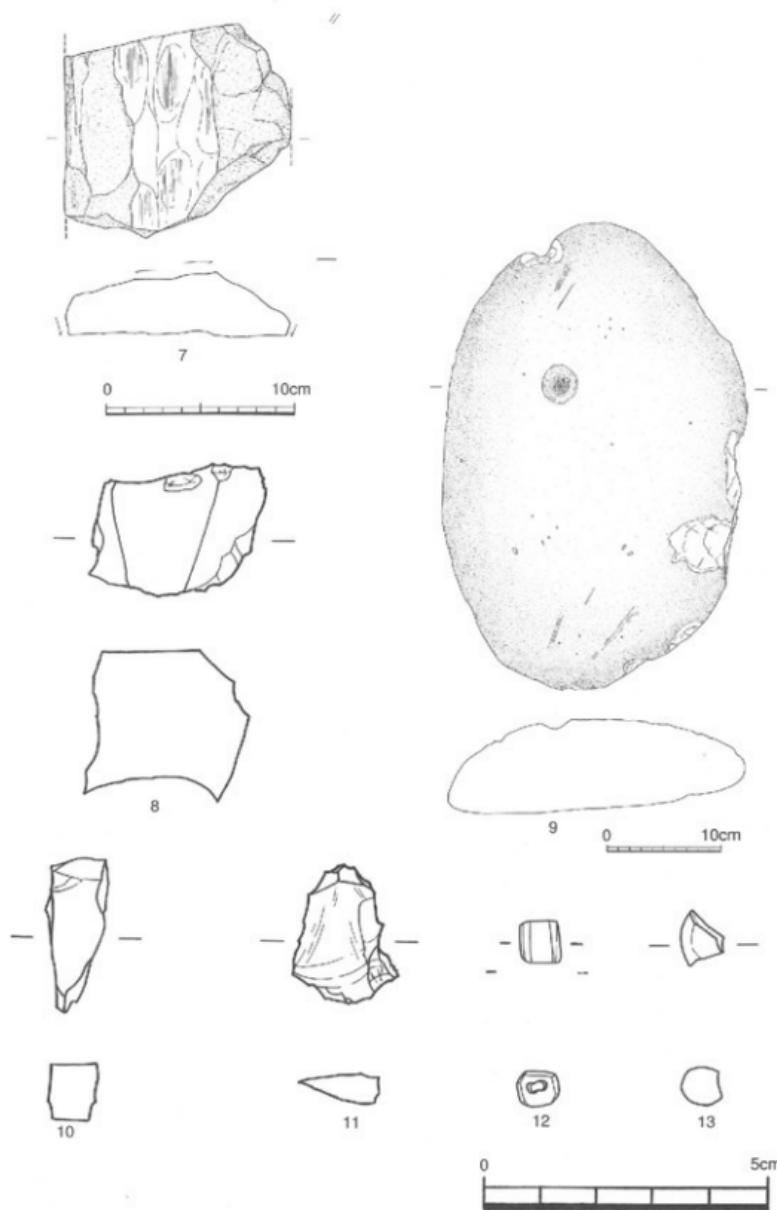


0 10cm

第33図 出土土器、陶磁器、土製品実測図 (S=1/3) 183~186 (壁面)、187 (S X29)、
188 (S I-2)、189(包含層)、190(包含層)、191~194(S D28)、195~196(S X29)、
197(S I-2)、198(壁面)



第34図 出土石製品実測図 ($S=1/3$) 1 (S D28)、2 (包含層)、3 (S D28)、4 (S I-2)、
5~6 (S D28)



第35図 出土石製品実測図 (7 S=1/3、9 S=1/5、他 S=1/1) 7~8 (S D28)、9 (S I-3)、10 (S D28)、11 (壁面)、12 (包含層)、13 (S I-2)

第6章 小 結

今回調査した押野ウマワタリ遺跡は発掘面積が約1,300m²とやや小規模ながら堅穴建物跡3棟、掘立柱建物跡2棟などを検出した密度の高い遺跡であった。しかし、調査区は区画整理開発区域の北西隅に位置することとなり、遺跡の中心は調査区からさらに北及び西方向の現在宅地化になっている所にあたると思われる。

調査で得た主要な遺構について所見を述べたい。

本調査区で見つかった堅穴建物跡は3棟でいずれも多角形をもつものであった。S I - 1は他の堅穴に比べ、遺物の総体量が少ない。これは本調査前の重機による掘削作業の時、調査担当者が誤って遺構覆土まで削りとってしまったからである。本来はもっと多くの遺物が存在していたと思われる。

S I - 2とS I - 3は切り合い関係をもつ。また、それぞれの堅穴は隅丸方形プランから五角形プランへと改修している。調査時の段階ではS I - 3の周溝がS I - 2床面検出で確認したことからS I - 2の方がS I - 3よりも新しいと考えていたが、出土遺物を観察するとS I - 2の方は後期後半（法仏期）、S I - 3は終末期（月影期）の土器が主体であることがわかった。また、特殊ピットの位置は時期が新しくなるにつれ堅穴中央から壁面へと移動する。S I - 2の特殊ピットは中央に存在し、S I - 3は真ん中より少し東南にずれており、S I - 2の方がS I - 3よりも少し古い形態をもつようである。以上から調査段階の見方を変え堅穴の新古関係を再整理すると、S I - 2（隅丸方形）→S I - 2（五角形）→S I - 3（隅丸方形）→S I - 3（五角形）という流れを想定した。

堅穴の覆土からは緑色凝灰岩の原石が定量出土している。また、管下木製品や砥石も確認していることから堅穴内で玉造り製作を行っていたと思われる。

本遺跡は後期後半から終末期にかけて展開していたようで、各遺構の土器を見ると両時期にまたがった土器が混在しているものもあり、大きく3時期に分かれているようである。以下、各主要遺構がいつの時期にあてはまるか表にしてまとめてみた。

	時 期	谷内尾（1983）	遺 構 番 号
押野ウマⅠ期	弥生後期後半	法 仏 式	S I - 2 SK3 SK9 SK18 SK21 SD23
押野ウマⅡ期			S I - 1 ? SB2 SK2 SD15
押野ウマⅢ期	弥生終末期	月 影 式	S I - 3 SK4 SK14 SK17 SD20

本遺跡から西約300m離れたところに弥生時代中期から終末期にかけての集落跡となる押野タチナカ遺跡が存在する。押野タチナカ遺跡は竪穴建物跡21棟、掘立柱建物跡6棟等を検出した大規模な集落遺跡である。本遺跡は押野タチナカ遺跡と同時期に併存しており、タチナカ遺跡の核村のような存在であったと推察される。

参考文献

- | | | |
|-----------|---|-------|
| 石川県教育委員会 | 『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 塚崎遺跡』 | 1976年 |
| 金沢市教育委員会 | 『金沢市西念・南新保遺跡』 | 1983年 |
| 谷内尾晋司 | 「北加賀における古墳出現期の土器について」
『北陸の考古学（石川考古学研究会会誌第26号）』 | 1983年 |
| 野々市町教育委員会 | 『御経塚町ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 | 1984年 |
| 野々市町教育委員会 | 『押野タチナカ遺跡 押野大塚遺跡』 | 1986年 |
| 石川考古学研究会 | 『シンポジウム「月影式」土器について 報告編』 | 1986年 |
| 吉岡 康暢 | 『日本海域の土器・陶磁・古代編』 六興出版 | 1991年 |

観察表

通巻番号	漁物番号	品種	法量 (cm)	底 置			色調	漁成	船土	漁獲状態	備考
				口縫部	体側	底部					
S 1 1	1	黒	C21.6 N18.8	a ヨコナデ b ヨコナデ			淡褐色	良	S-1 M-1	小片	腹凹縫 7条 外面:スズ
S 1 1	2	黒	C18.6	a ヨコナデ b ヨコナデ			外 淡褐色 内 淡褐色	良	S-1 M-1	1/4	腹凹縫 7条 外面:スズ
S 1 1	3	黒	C18.4	a ヨコナデ b ヨコナデ			暗褐色	良	S-1	1/8	外面:スズ
S 1 1	4	黒	C18.4 N15.4	a ヨコナデ b ヨコナデ			褐色	良	S-2 M-1	小片	外面:スズ
S 1 1	5	底部	B6.6	a ハケ b ハリ+ハサ	褐色	並	S-1 M-2 当網底計1	劣			
S 1 1	6	豎	N21.6	a 強烈黒斑 b 肉質	b ケズリ		外 淡褐色 内 黑褐色	少や 不良	S-2 M-2	小片	突起部アクリ 海綿骨針
S 1 1	7	高坏		a ミガキ b ミガキ			淡褐色	良	S-1	1/2	
S 1 1	8	高坏	C22.6	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ		淡褐色	良	S-1 M-1	小片	
S 1 2	9	黒	C29.0 N25.1 W2.2	a ナデ b ナデ			淡褐色	良	S-1 M-2 L-2	ほぼ完	外外面:黒褐色付着物
S 1 2	10	黒	C34.5 N21.0 W41.1 B7.3 H4.2	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ	a ハケ b ケズリ	淡橙褐色	並	S-1 M-2 L-1	劣	腹凹縫10~11 外茎葉ナデ
S 1 2	11	黒	C21.2 N17.0	a ナデ b ナデ			淡褐色	並	S-1 M-1	1/8	指頭底痕 腹凹縫6~7
S 1 2	12	黒	C18.0 N14.8	a ナデ b ナデ			淡褐色	並	S-1 M-1	1/6	外面:スズ
S 1 2	13	黒	C18.2 N14.4	a 強烈仔 b ハニク	a ハケ b ケズリ		淡橙褐色	並	S-2 M-1	1/8	腹凹縫10 外外面:崩耗
S 1 2	14	黒	C16.4 N13.9	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ		淡褐色	良	S-M-1	1/5	外外面:スズ 腹凹縫8条 外面:崩耗
S 1 2	15	黒	C16.6 N13.6	a ナデ b ナデ	b ケズリ		淡橙褐色	並	S-1 M-1 1/1	1/3	外面:崩耗
S 1 2	16	黒	C16.0 N12.4	a ナデ b ナデ			淡褐色	並	S-1 M-1	1/7	外外面:スズ
S 1 2	17	黒	C37.1 N34.4 W45.0 B8.1 H1.1	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ	a ハケ b ケズリ →ミガキ	灰褐色 暗灰色	並	S-1 M-1 L-2	口縫1/2 底部1/4	
S 1 2	18	黒	C16.4 N14.7 W18.2 B2.1 H19.1	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ	a ハケ b ケズリ	淡褐色	良	S-1 M-2 L-1	口縫底部 劣 体部1/4	外外面:スズ
S 1 2	19	黒	C22.2 N18.6	a ナデ b ナデ	b ケズリ		淡褐色	並	S-M-L-1 赤褐色の粒 1/2	2/3	外外面:スズ
S 1 2	20	黒	C29.4 N16.8	a ナデ b ナデ	a ハケ b ハリ+ハサ フジ		淡褐色	並	S-M-1	1/6	外外面:スズ
S 1 2	21	黒	C16.0 N14.4	a ナデ b ナデ			淡褐色	並	S-M-1	1/7	外外面:スズ
S 1 2	22	黒	C29.2 N26.4 W35.4 B7.6 H39.4	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ ナデ b ケズリ	a ハケ b ケズリ	淡橙褐色	良	S-1 M-2 L-2	劣	内外面口縫:スズ
S 1 2	23	黒	C26.0 N24.0	a ナデ b ナデ	a ハケ b ハナデ		灰褐色	並	S-1 M-2 石墨	1/3	裏斑あり
S 1 2	24	底部	B7.0		a ハケ	a ハケ b ハナデ ケズリ	外 淡褐色 内 淡褐色	並	S-1 M-2	劣	裏斑あり 外底面:ナデ
S 1 2	25	黒	C24.5 N21.8	a ナデ b ナデ	b ケズリ	a R+ 難なびき b	灰褐色	並	S-M-L-1	1/7	
S 1 2	26	底部	B6.0				淡褐色	並	S-1 M-1 L-1	劣	
S 1 2	27	底部	B2.8		a ハケ b ケズリ	a ハケ b ケズリ		劣			外外面:スズ 外底面:ハケ目残る
S 1 2	28	底部	B2.0		a ハケ b ケズリ		棕褐色	並	S-1 M-2	1/2	外底面:スズ
S 1 2	29	黒	C12.5 N9.9	a ミガキ b ミガキ	a ナデ ナデ		淡褐色	並	目立つ砂粒 含まない	劣	海綿骨針
S 1 2	30	黒	C12.0 N8.8	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ケズリ		淡橙褐色	良	S-1 M-1	1/7	
S 1 2	31	豎	C17.2 N10.2	a ナデ b ナデ(口縫) ハリ(頭部)			淡褐色	良	S-1	1/2	口縫:スズ

造営番号	造物番号	部位	法薬 (cm)	口縫目 a ミガキ b ミガキ 磨耗ナダ	骨頭 a ミガキ b ミガキ	裏筋 a ミガキ b ナダ	裏筋 a ミガキ b ナダ	色調	発成	出土	遺存状態	備考	
S 1 2	32	壺	C:11.2 N:10.0	a ミガキ b ミガキ 磨耗ナダ				淡褐色 並	S-1	1/3	外面:スズ		
S 1 2	33	高壺	C:26.8	a ミガキ b ミガキ				淡褐色 並	S-1 M-1 L-1 赤褐色の粒-2 (焼土色か?)	1/4	内面:剥離		
S 1 2	34	脚部		a ミガキ b ナダ				淡褐色 並	S-M-1	完	段り目あり		
S 1 2	35	高壺		a 磨耗 b 磨耗	a/b ミガキ 磨耗			灰褐色 並	S-1	柱状部 完	内外面:磨耗部		
S 1 2	36	高壺 柱状部		a ミガキ b ナダ ナダ→ ナダ				淡灰黃褐色 並	S-1	完			
S 1 2	37	脚部		a ハクリ 磨耗 ナダ				淡褐色 並	S-M-1 焼土色-1	完	透かし孔・下孔のみ直存 外側:ハクリ+磨耗		
S 1 2	38	脚部	B:17.0		a 磨耗 ミガキ b 磨耗 ナダ			灰褐色 並	S-1 M-2	1/8	キズアリ		
S 1 2	39	脚部	B:11.0		a/b 磨耗により 不明			灰褐色 並	S-1 M-1	1/3	内外面:磨耗		
S 1 2	40	脚部	B:8.0		a ミガキ b ナダ			淡褐色 並	S-1	1/5			
S 1 2	41	装飾器台	臺下帯付 15.0	a 磨耗 b 磨耗				橙褐色 良	S-1		外側:青苔 全体に塵埃 表面にスカシ(4種) 撥水性B 外側スス		
S 1 2	42	時	C:11.8 N:9.45 W:10.2 B:1.4 H:10.15	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ	a ハケ b ケズリ	淡褐色 並	S-M-1	1/3				
S 1 2	43	小型鉢	C:7.2 W:10.2 B:1.4 H:8.0(裏)	a ミガキ b ナダ	a ミガキ b ナダ	a ミガキ b ナダ	外:赤褐色 内:茶褐色	並	S-1	1/8	外面:スズ、赤彩 海綿骨針		
S 1 2	44	壺	つまみ足 3.6	a 磨耗 b ミガキ				淡褐色 並	S-1 赤褐色の粒-1	つまみ足 完	内外面:磨耗		
S 1 3	45	壺	C:32.8	N:27.6	a ナダ b ナダ→ ミガキ	a ハケ b ケズリ	暗褐色 並	S-1 M-2 L-1	1/2				
S 1 3	46	壺	C:24.8 N:20.6 C:18.0 N:14.4 W:19.2	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		淡褐色 並	S-M-2 赤褐色-1	1/3	外側:スズ 撥水性B			
S 1 3	47	壺	C:18.0 N:14.4 W:19.2	a ナダ b ハケ	a ハケ b ケズリ		淡褐色 並	S-1 赤褐色-1	1/8	外側:スズ 赤褐色-1			
S 1 3	48	壺	C:17.8 N:15.0 C:17.8 N:14.8 W:25.0	a ナダ(磨耗) b ナダ(磨耗)	a ハケ b ケズリ		淡褐色 並	S-1 M-2 L-1	1/4	外側:スズ 赤褐色-1			
S 1 3	49	壺	C:17.8 N:14.8 W:25.0	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		茶褐色 並	S-1 M-2	4/5	外側:スズ			
S 1 3	50	壺	C:18.2 N:15.2 W:20.4	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		淡褐色 良	S-1 M-2	ほぼ完	撥水性B 外側口縫:赤頭斑痕			
S 1 3	51	壺	C:18.5 N:14.4 W:19.5	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		暗褐色 良	S-M-2 L-1	1/4	外側:スズ、剥離			
S 1 3	52	壺	C:17.8 N:15.0	a ナダ b ナダ	a ケズリ b ハケ		淡褐色 並	S-1 M-2 赤褐色-1	1/8	外側:スズ			
S 1 3	53	壺	C:13.6 N:11.2	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		暗褐色 並	S-M-1	1/4	外側:スズ			
S 1 3	54	壺	C:16.4 N:13.0	a ナダ b ナダ			暗褐色 並	S-2	3/5	外側:スズ 青頭斑痕 海綿骨針			
S 1 3	55	壺	C:16.0 N:17.8	a ナダ b ナダ	b ケズリ		淡褐色 並	S-1 M-2 赤褐色-1	1/3	外側:スズ			
S 1 3	56	壺	C:16.2 N:14.3	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		淡褐色 並	S-M-1	1/7	撥水性B 青頭斑痕			
S 1 3	57	壺	C:17.8 N:15.0	a ナダ b ナダ	a ハケ b ケズリ		淡褐色 並	S-2 M-1 露斑-1	1/4	外側口縫:スズ			
S 1 3	58	壺	C:15.2 N:12.6	a 不明 b 不明	a 不明 b 不明		暗褐色 並	S-M-1	1/3	内外面:磨耗+剥離 海綿骨針			
S 1 3	59	高壺		a ミガキ	a ミガキ b ナダ	a ミガキ b アダ	暗褐色 並	S-M-1	完	透かし孔3ヶ所 外側:スズ 撥水性B			
S 1 3	60	脚部	B:11.7					淡褐色 並	S-1	1/8	透かし孔3ヶ所 外側:スズ 撥水性B		
S 1 3	61	高壺	C:26.4	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ		淡褐色 良	S-1 M-1 L-1	1/4	内面:剥離 海綿骨針-1			
S 1 3	62	高壺	C:12.0	a 磨耗 b 磨耗			淡褐色 並	S-1 M-1 赤褐色または 焼土色-2	1/3	内面:磨耗			
S 1 3	63	高壺		a ミガキ b ミガキ			暗褐色 並	S-1	1/4	内外面:剥離			

遺物番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	頭部 口顎部	身体 ミガキ	尾部 ミガキ	色調	鉄成	出土	保存状態	備考
S I 3	64	縦台	C17.0	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキか?	赤褐色	S-1 赤色鉄	1/8	外面:赤彩 浸漬状すりあり 金属で(2ヶ所)剥離か?	
S I 3	65	縦(無頭) W:10.6 (無)	C6.0(横) W:10.6 (無)	a ミガキ b	a ミガキ b	a ミガキ b	外・赤褐色 内・明茶褐色	並	S-1	小片	外面:赤彩 口縁内側端部:赤彩 口縁外端部:銀白色
S I 3	66	有孔鉢	C:15.2 B:3.5 H:13.3	a b	a b	a ミガキ b ミガキ	外・淡褐色 内・灰褐色	並	S-M-L-1 頭部-1	ほば完 口縫1cm 欠損	口縫外端:剥離鉄 底盤穿孔部の径1.25cm
S I 3	67	鉢	C:11.5 B:4.6 H:5.8	a ナテ b ケズリ	a ナテ b ケズリ	a ミガキ b ケズリ	淡褐色	並	S-1 底土焼か?-1	1/3	外面:スヌ付着 底面:ナテ
S I 3	68	手づくね 土器	C:8.1 W:8.7 B:3.4 H:6.8	a ? b ?	a ? b ?	指揮さえ の痕がみ うれり	淡黃褐色	並	S-1	1/4 開完	
S I 3	69	鉢	つまみ復 2.4 C16(周) H:3.5(高)	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ		赤褐色	並	S-M-1	つまみ部 安 口縫部 小片	外面:赤彩
SK1	70	壺	C17.0 N:14.0	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		淡褐色	良	S-1 M-1 底土焼か?	1/3	外面:スヌ
SK1	71	壺	C:15.8	a ヨコナデ b ヨコナデ			淡褐色	やや 不良	S-1 M-2 頭部-1	1/8	外面:スヌ
SK1	72	器台 柱状器 圓筒		a ミガキ b ナテ			茶褐色	良	S-2 M-1 -2 底土焼か?	完	
SK1	73			a ミガキ b ヨコナデ			暗褐色	良	S-2 M-1	小片	
SK1	74	器台	墨下部	a ミガキ b ヨコナデ			淡褐色	良	S-1	1/7	外面:赤彩
SK2	75	壺	C:21.6 N:17.6	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		褐色	並	S-1 M-2	1/4	頭部焼5 指頭圧痕 外面:スヌ
SK2	76	壺	C:16.4 N:13.3	a ヨコナデ b ヨコナデ		b ケズリ	褐色	並	S-1 M-2	1/3	褐色斑
SK3	77	壺	C:15.4 N:13.2	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		淡褐色	良	S-1 M-1	1/3	指頭圧痕 頭部焼3
SK4	78	壺	C:19.8(復) N:14.8(復) C:19.4(復) N:15.8(復)	a ヨコナデ b ヨコナデ			淡褐色	良	S-1 M-1	1/4	外面:スヌ 指頭圧痕
SK4	79	壺		a ミガキ b ミガキ			茶褐色	良	S-1	小片	頭部凹
SK4	80	高杯		a ミガキ b ミガキ			淡褐色	良	S-1 M-1	小片	腹底3
SK4	81	高杯		a ヨコナデ b ヨコナデ			淡褐色	並	S-1 残土 底2.7-1	1/2	
SK4	82	脚部	B:12.6	a b 脚部 調整不明			褐色	中-中 不良	S-1 M-1 底土焼か? -1 海綿骨質-1	1/4	
P5	83	壺	C:16.2	a ヨコナデ b ヨコナデ			褐色	良	S-1 M-1 L-1	1/8	外面:スヌ
SK6	84	脚部	B:9.8		a ミガキ b ナテ		淡褐色	良	S-1	1/2	海綿骨質
SK7	85	高杯	B:21.0	a ミガキ b ミガキ			淡褐色	並	S-1 M-1	1/8	
SK7	86	高杯		a ミガキ b ミガキ			淡褐色	並	S-1	小片	
SK7	87	底部	B:2.6	a ミガキ b ケズリ ナテ	a ミガキ b ケズリ		淡褐色	良	S-1 M-1 底土焼か-1	完	外面:赤彩
SK7	88	装飾器台		a ミガキ b ミガキ			淡褐色	並	S-1	1/8	外面:赤彩 運送用穴
P8	89	壺	C:15.4	a ヨコナデ 頭部ハケ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		淡褐色	良	S-1	1/8	
SK9	90	壺	C:17.2 N:16.0 W:19.0	a ナテ b ナテ	a ハケ b ケズリ		淡褐色	並	S-M-2 L-1	1/3	外面:スヌ 薄耗 肩部:波状文
SK9	91	高杯	C:24.4	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ		明茶褐色	良	S-M-1	1/8	
SK11	92	壺	C:14.0	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ヨコナデ b ヨコナデ		淡褐色	良	S-1 M-1	1/8	
SK12	93	底部	B:3.2		a ハケ b ナテ		褐色	良	S-1 M-1	完	外觀:スヌ
P13	94	把手		a ミガキ b ケズリ			褐色	良	S-1 M-1	小片	赤彩痕
SK14	95	壺	C:20.0 N:16.2	a ヨコナデ b ヨコナデ			淡褐色	並	S-1 M-2	1/8	外面:スヌ 頭部焼
SD15	96	壺	C:18.0 N:15.0	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		褐色	並	S-2 M-1	1/4	褐色斑9
SD15	97	壺	C:19.8	a ミガキ b ナテ	a ミガキ b ナテ		淡茶褐色	良	S-1 M-1	1/4	指頭圧痕9 外面:スヌ 海綿骨質(複数)
SD15	98	脚部	B:14.0	a ミガキ b ハケ	a ミガキ b ハケ		褐色	良	S-1 残土焼 -微量	1/2	漢穴3
SD15	99	底部	B:10.6	a ミガキ b ハケ	a ミガキ b ハケ		褐色	良	S-1	1/3	

遺傳番号	遺伝子番号	群種	法量 (cm)	口被細胞	後脚	前脚	色調	焼成	粘土	遺伝状態	備考
SK16	100	高坪	C:22.5	a ミガキ b ミガキ			茶褐色	良	S-1	小片	
SK17	161	黒	C:19.6 N:16.1	a ハケ b ケズリ			深褐色	良	S-1 M-2 L-2	1/2	表面凹凸7条 指頭圧痕
SK17	162	黒	C:16.0 N:13.8	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	並	S-1 M-2 赤色粒-1 L-1	3/4	表面凹凸8条 指頭圧痕(内面)
SK17	163	黒	C:17.4 N:14.4	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	並	S-1 M-2 赤色粒-1 L-1	1/4	外側：スヌ 内側：スヌ
SK17	164	黒	C:18.4 N:14.1	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	並	S-1 M-2 赤色粒-1 L-1	1/5	表面凹凸9条 指頭圧痕
SK17	165	黒	C:17.5 N:14.0	a ナデ b ナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	良	S-1 M-1 L-1 焼土焼-1	1/5	外面：墨耗 指頭圧痕 内面：深色付着物あり 開口部あり 数日により全体不明確
SK17	166	黒	C:15.4 N:13.2	a ナデ b ナデ	a ハケ b ナデ		深褐色	並	S-1 M-1 海綿骨針-1	1/3	
SK17	167	黒	C:14.0 N:11.2		a ナデ b ナデ		深褐色	並	S-1	1/6	外側：スヌ
SK17	168	黒	C:14.6	a ナデ b ナデ			深褐色	並	S-1 費母-1	1/6	
SK17	169	黒	C:26.4(周)	a アゲ b アゲ			明褐色	並	S-1 M-1 費母-1	小片	
SK17	170	黒	C:16.9 N:11.5	a ナデ b ナデ			外 深褐色 内 暗褐色	良	S-1 M-1 焼土焼-1 海綿骨針-2	1/6	
SK17	171	黒	つまみ器 2.6	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ		深褐色	良	S-M-1	完	
SK17	172	高坪			a ミガキ b ミガキ		灰褐色	並	S-1 海綿骨針-2	小片	内面：スヌ
SK17	173	網部	B:14.4		a ミガキ b ナデ		深褐色	良	S-1 費母-1	1/7	
SK17	174	網部	B:17.6		a ミガキ b ミガキ		深灰褐色	並	S-1 費母-1	小片	外側：スヌ 裏面墨キズあり
SK17	175	黒	C:10.8 W:17.8 B:16.8 H:13.6	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ		深褐色	良	S-M-L-1 焼土焼-2		外側墨：彩形 内面墨：彩形
SK17	176	黒	C:9.5(周) H:14.0(周)	a ミガキ b ミガキ	a ミガキ b ミガキ		深褐色	良	S-M 焼土焼-2	4/5	外側墨：赤彩
SK18	117	黒	C:16.0 N:16.2	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	良	S-1 焼土焼か？ -1	小片	外側：スヌ
SK18	118	高坪	C:25.2	a ミガキ b ミガキ			深褐色	並	S-1	1/6	海綿骨針
SK18	119	高坪	C:30.8	a ミガキ b ミガキ			褐色	並	S-1	1/6	海綿骨針
SK19	120	器台		a ミガキ b ナデ			褐色	良	S-1 M-1	1/2	
SK20	121	黒	C:18.1 N:16.0	a ナデ b ナデ	b ケズリ		深褐色	良	M-1 L-2 赤色の粒-2	1/4	外側：スヌ
SK20	122	高坪	C:31.0	a ミガキ b ミガキ			外 暗色 内 暗褐色	良	S-M-1 焼土焼-1	1/2	
SK20	123	高坪	C:27.0(周)	a ミガキ b 焼耗	a ミガキ b 焼耗		深黄褐色	良	S-2	小片	
SK20	124	網部	B:17.0	a ミガキ b 焼耗	a ミガキ b 焼耗		灰褐色	良	S-1 M-2	1/6	透かし孔1箇所(径1.2cm)
SK20	125	網部	B:14.4	a ミガキ b 焼耗	a ミガキ b 焼耗		深黃褐色	並	S-1 M-1	1/2	透かし孔3箇所
SK21	126	黒	C:17.8 N:15.0	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ		暗褐色	並	S-1 M-1 L-1	小片	外側：スヌ 織田標4
SK21	127	黒	C:(17.5) N:(14.2)	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ		深褐色	良	S-1 M-1	小片	外側：スヌ 織田標9
SK21	128	黒	C:21.6 N:18.2	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	並	S-1 M-2 焼土焼か？-1	1/4	外側：スヌ 織田標7 指頭圧痕
SK21	129	黒	C:(20.6) N:(16.8)	a ヨコナデ b ヨコナデ	網頭ハケ		暗褐色	良	S-1 M-1	小片	外側：スヌ 織田標9
SK21	130	黒	C:16.0 N:11.2	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		茶褐色	良	S-1	1/6	織田標11
SK21	131	黒	C:17.4 N:16.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ナデ		褐色	並	M-1	1/7	外側：スヌ
SK21	132	黒	C:17.6 N:16.6	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ		褐色	良	S-1 M-1	1/7	外側：スヌ
SK21	133	黒	C:14.0 N:11.7	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	やや 不良	S-1 M-2	1/6	外側：スヌ
SK21	134	黒	C:22.6 N:18.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ		深褐色	並	S-1 L-1	小片	
SK21	135	黒	C:14.2 N:13.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ		深褐色	良	S-1 M-1	小片	
SK21	136	黒	C:14.8 N:12.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ		深褐色	並	S-1 M-2 焼土焼か？-1	1/2	外側：スヌ
SK21	137	黒	C:(15.6) N:(13.6)	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ		深褐色	良	S-1 M-1	小片	外側：スヌ

通査番号	植物番号	器種	法星 (cm)	頭 口縁部 骨部 表面	頭 骨部 表面	色調	性成	出土	保存状態	備考	
SK21	138	壺	C16.0 N:12.8	a ハードコロナ b ヨコナデ b ケズリ	a ハケ b ケズリ	褐色 黒褐色	真	S-1 M-2	1/8		
SK21	139	壺	C29.6 N:25.0 B:6.2	a ヨコナデ b ヨコナデ b ケズリ	a ハケ b ケズリ	淡褐色 黒褐色	真	S-1 M-2	1/2	内外面口縁部:スス	
SK21	140	壺	C16.4 N:13.8	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ	褐色 黒褐色	やや 不良	S-1 M-2 遺物群1-2	1/2	外面:スス	
SK21	141	壺	C16.6 N:13.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ	褐色 黒褐色	真	S-1 M-1 L-1 灰土 塊か1-1	1/2	内外面:スス	
SK21	142	壺	C15.4	a ハケ b ハケ	a ハケ	淡褐色 黒褐色	やや 不良	S-1 M-1 L-1 残量	1/3		
SK21	143	壺	C16.0 N:10.0	a ハード b ナード	a ハケ b ハケ	淡褐色 黒褐色	真	S-1 M-1 L-1 残量 地工块か2-1	1/5		
SK21	144	壺	C16.8	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ハケ	淡褐色 黒褐色	真	S-1 M-1 地工块か2-1	小片	外面:スス	
SK21	145	高坏	C23.6	a ミカキ b ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1 M-1	1/7		
SK21	146	↓同一	B:16.2	a ミカキ	a ミカキ b ミカキ	真	S-1 壷 色斑か7-1	1/2	透穴3		
SK21	146	高坏	C24.0	a ミカキ b ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1 M-2	1/2	内外面:剥離跡	
SK21	147	高坏		a ミカキ b ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1	1/3		
SK21	148	脚部	B:16.0		a ミカキ b ナデ	赤茶褐色 内 淡彩色 外 赤茶褐色	真	M-微量 S-1	1/6	外面:赤茶褐色	
SK21	149	高坏		a ミカキ b ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1	1/4		
SK21	150	高坏		a ミカキ b ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1	小片		
SK21	151	高坏		a ミカキ b ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1	小片		
SK21	152	高坏	C30.0	a ミカキ b ミカキ	a ミカキ b ミカキ	淡褐色 黒褐色	真	S-1 遺物群1-1	1/4		
SK21	153	高坏	C30.6	a ミカキ b ミカキ	a ミカキ b ミカキ	淡茶褐色 黒褐色	真	S-1 M-1	小片		
SK22	154	壺 直進	B:2.6	a b ミカキ		褐色 淡褐色	真	S-1	1/2		
SD23	155	壺	C:17.0 N:13.6	a ヨコナデ b ヨコナデ 頭部ハケ	b ケズリ	淡褐色 黒褐色	真	S-1 M-1	1/8	擬凹線5 外面:スス	
SD23	156	壺	C:14.0 N:11.0	a ヨコナデ b ヨコナデ 頭部ハケ		褐色	真	S-1	1/8	擬凹線6 指痕压痕	
SD23	157	壺		a ヨコナデ b ヨコナデ		褐色	真	S-1 M-1	小片	擬凹線4 外面:スス	
SD24	158	蓋台	受盤径 12.2	a ミカキ b ミカキ		褐色	真	S-1	1/6	擬凹線2	
SK25	159	壺	C16.6 N:14.6	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ	淡茶褐色 黒褐色	真	S-1 M-1	1/8	海綿骨針	
P 26	160	脚部	B:16.0	a ミカキ b ナデ		淡褐色 黒褐色	真	S-1	1/9	海綿骨針	
P 27	161	柱状茎		a ミカキ		淡褐色 黒褐色	真	S-1	1/1	外面:剥離	
S D 28	162	底部	B:5.0		a 頸部 底面 b タリ→ ガフ	淡褐色 黒褐色	真	S-2 石灰	1/2		
S D 28	163	壺	C32.2 N:20.0	a ヨコナデ b ヨコナデ		褐色 淡褐色	真	S-1 M-2	小片	指痕压痕 擬凹線12 海綿骨針(微量)	
S D 28	164	壺	C22.8 N:19.6	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ	褐色	真	S-2	小片	擬凹線12 外面:スス	
S D 28	165	壺	C21.0 N:16.8	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ	褐色 淡褐色	真	S-1 M-1	1/8		
S D 28	166	高坏 脚部		a ミカキ b タリ→ ガフ	a ミカキ b タリ→ ガフ	褐色 淡褐色	真	S-2 M-1 L-1			
S D 28	167	壺	C:9.8 H:3.35 つまみ径 3.0	a 痕耗 b 痕耗		褐色 淡褐色	真	S-1 M-2	1/4		
S K 29	168	壺	C18.0 N:15.8	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハグ b ケズリ	外 茶褐色 内 淡褐色	真	S-1 M-1	1/8	擬凹線12 外面:スス	
包含層	169	壺	C19.6 N:16.0	a ナデ b 痕耗		淡黃褐色	真	S-M-L-1	1/8	外面:スス	
包含層	170	壺	C15.0 N:13.5	a ナデ b ケズリ		暗褐色	真	S-1	1/7	外面:スス	
包含層	171	壺	C21.6 N:18.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ	淡褐色 黒褐色	真		小片	外面:スス	
包含層	172	壺	C17.6 N:15.0	a ヨコナデ b 痕耗	b ケズリ	褐色 淡褐色	やや 不良	S-2 M-2 L-1	1/2		
包含層	173	底部	B:6.8		a ハグ b ケズリ	淡褐色 外 淡茶褐色 内 淡黃褐色	真	S-1 M-1 L-2	1/2		
包含層	174	底部	B:8.4		a ハグ b ケズリ	淡褐色 外 淡茶褐色 内 淡黃褐色	真	S-M-1 L-2	1/2	外面:スス	

通査番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	測定 口部径 C:9.8 H:4.15 つまみ径 2.15	形 口部 b ミガキ	形 体部 a 壁耗 b ミガキ	形 底部 b ミガキ	色調	焼成	胎土	保存状態	備考
包含層	175	盃	C:25.0	a ミガキ b ミガキ				外 灰褐色 内 深褐色	並	S-M-1	4/5	外面:磨耗
包含層	176	盃	C:17.6	a ミガキ b ミガキ				深褐色	良	S-2 M-1 L-1 胎土 焼成?	1/3	
包含層	177	甕	C:17.6	a ミガキ b ミガキ				深褐色	良	S-1 M-2 焼土焼成? 微量	1/6	
包含層	178	壺	C:27.6	a ミガキ b ミガキ				深褐色	良	S-1 M-2 焼土焼成? 微量	1/7	
包含層	179	器台	盤部径 15.6	a ミガキ b ミガキ				深褐色	良	S-1 M-2 焼土焼成? 微量	ほぼ完	外面:赤彩痕
包含層	180	器台	安部径 17.2	a ミガキ b ミガキ				深褐色	良	S-1 M-1 焼土焼成? 微量	1/4	
壁面	181	甕	C:19.2 N:15.9	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ			深褐色	並	S-2 M-1	1/3	腹凹縫? 指標狂紋 裏面:スズ
壁面	182	甕	C:14.6 N:12.4	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ハケ b ケズリ			深褐色	良	S-1 M-1 焼土焼成?	1/6	
壁面	183	甕	C:24.2 N:21.0	a ヨコナデ b ヨコナデ	b ケズリ			深褐色	良	S-1 M-1 L-1	1/6	
壁面	184	盃		a ミガキ b ミガキ				深褐色	並	S-1 M-1	小片	外面:赤彩痕
壁面	185	壺		a ミガキ b ミガキ				深褐色	良	S-1	1/2	
壁面	186	脚部	B:15.0			a 磨耗 b 破耗		深褐色	並	S-2	1/4	
包含層	190	圓窓器 片	C:14.0 B:9.2 H:3.6					灰褐色	並	S-1	小片	
SD28	191	圓窓器 片	C:18.0	a 回転形 b 回転形	a 回転形 b 回転形			外 灰褐色 内 明灰色	良		小片	
SD28	192	圓窓器 片	C:19.0	a 回転形 b 回転形	a 回転形 b 回転形			深褐色	良		小片	内外面:スズ
SD28	193	天蓋系碗	B:4.0	a 回転形 b ミガキ	a 回転形 b ミガキ	a 回転削り →回転形 b ミガキ		外 深褐色 内 黑褐色	良		1/2	
SD28	194	珠洲 甕	C:35.6 N:20.0	a ヨコナデ b ヨコナデ	a ヨコナデ b ヨコナデ			灰褐色	良		1/6	
SX29	195	吉村皿	B:9.6		a 回転形 b 回転削り →形			外 薄青色 内 白色	良		1/4	
SX29	196	小型甕	B:4.4	a ナデ b ナデ	b 押押し			深褐色	並	S-1 M-2 L-1	3/4	

凡例

法量
C—口径
N—頸部径
W—胴部
最大径
B—底径
H—器高

調整
a—外面
b—内面

色調
外—外面
内—内面
L—3 mm以上

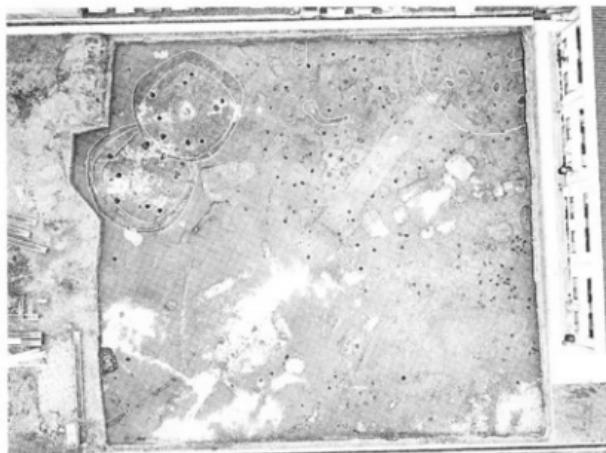
胎土
S—1 mm以下
M—1 ~ 3 mm

0—ほとんど含まず
1—少量含む
2—やや多い
3—多い

() は推定径



調査区遠景（東から）
〔石川県立埋蔵文化財センター提供〕



調査区全景（真上から）



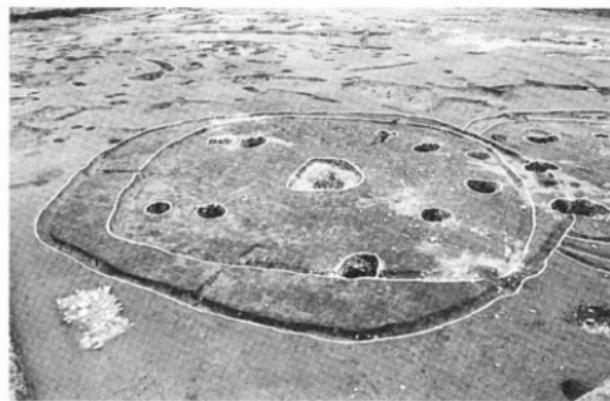
平成2年度調査区
(西側水路) 全景（北から）



平成3年度調査区全景
(北西から)



S I - 1 (南東から)



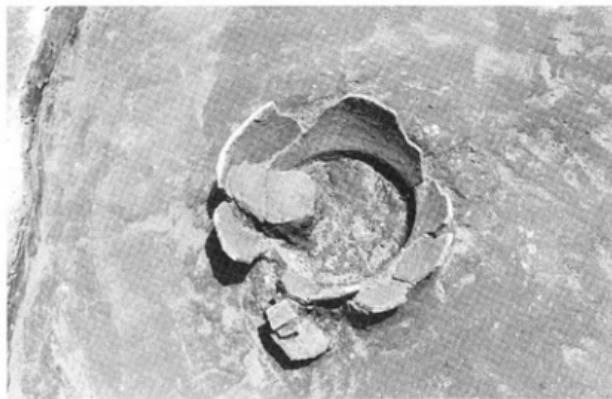
S I - 2 (南から)



SI-3 (南から)



SI-2とSI-3
(南東から)



SI-2 土器I7出土状況

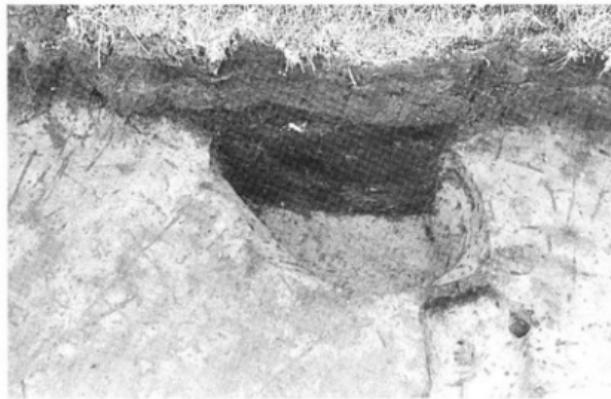
図版4



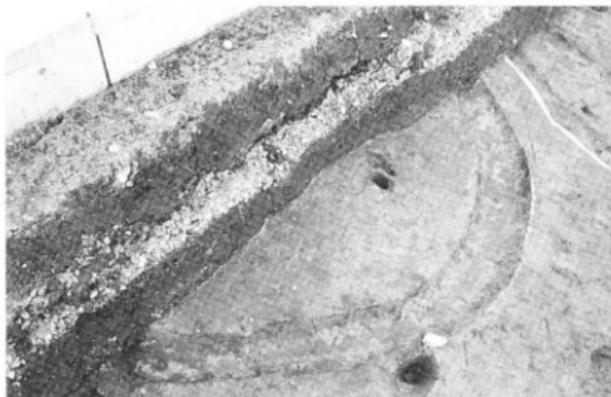
S B 1 (西から)



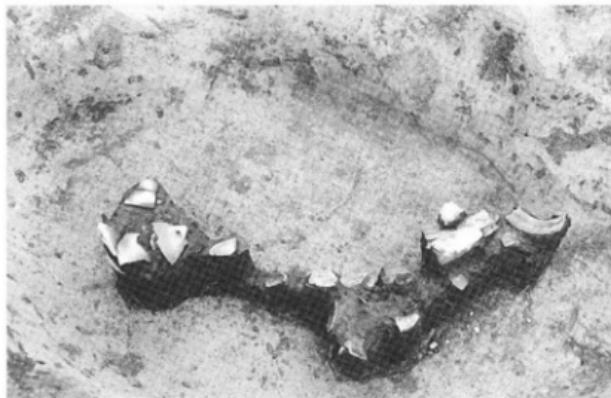
S B 2、S D15、S K18
(南から)



S K 9 (東から)



S D10 (南東から)



S K17土器出土状況



S K17 (南から)

図版6



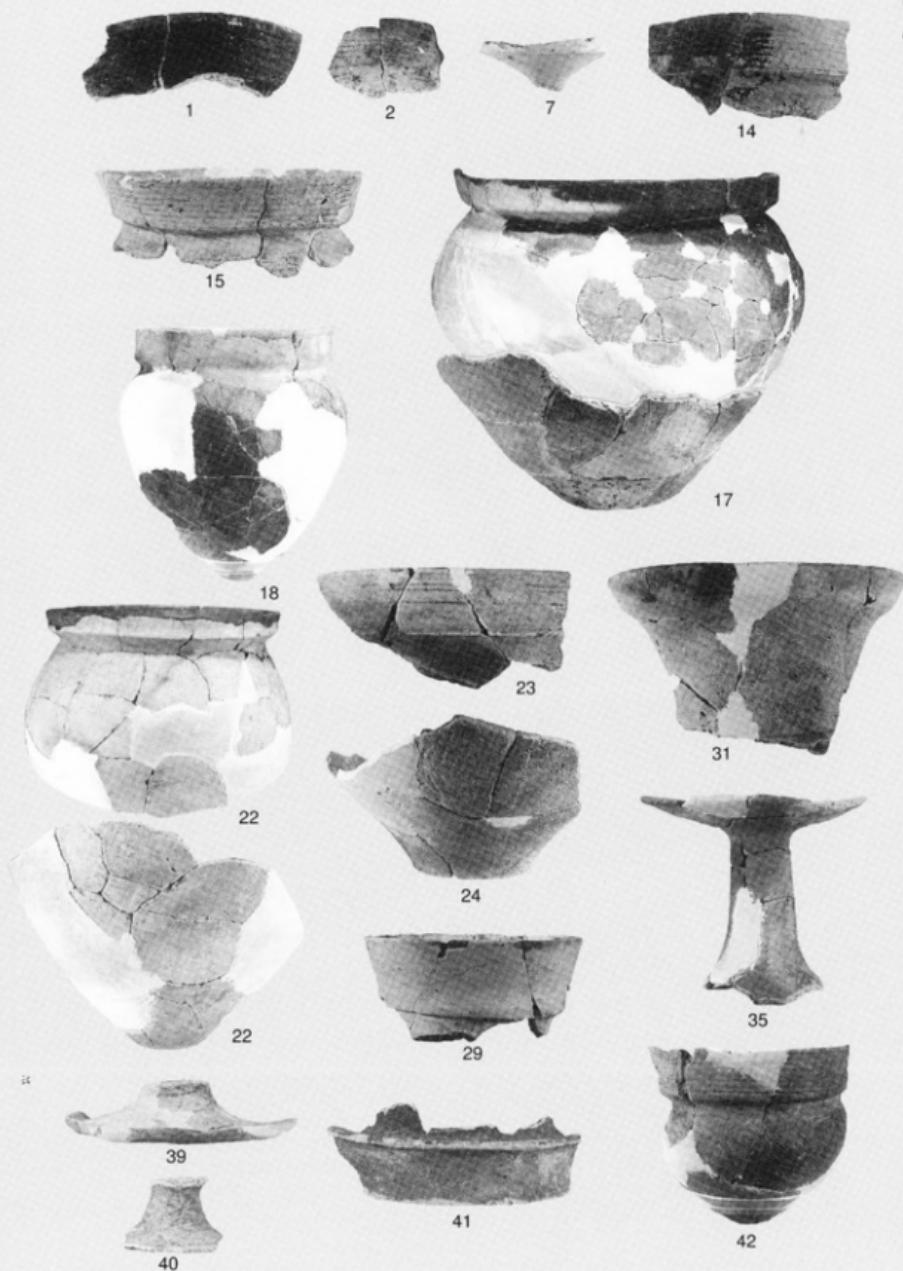
S D20 (南から)

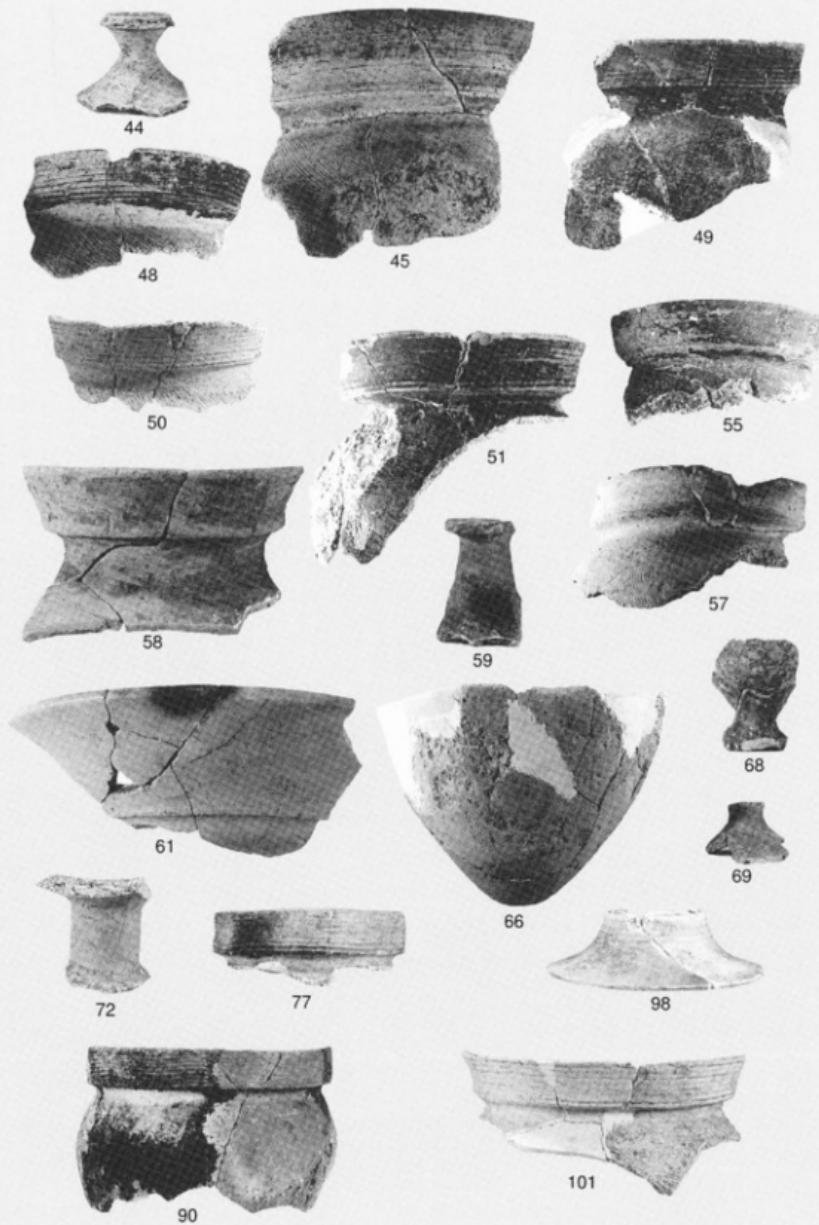


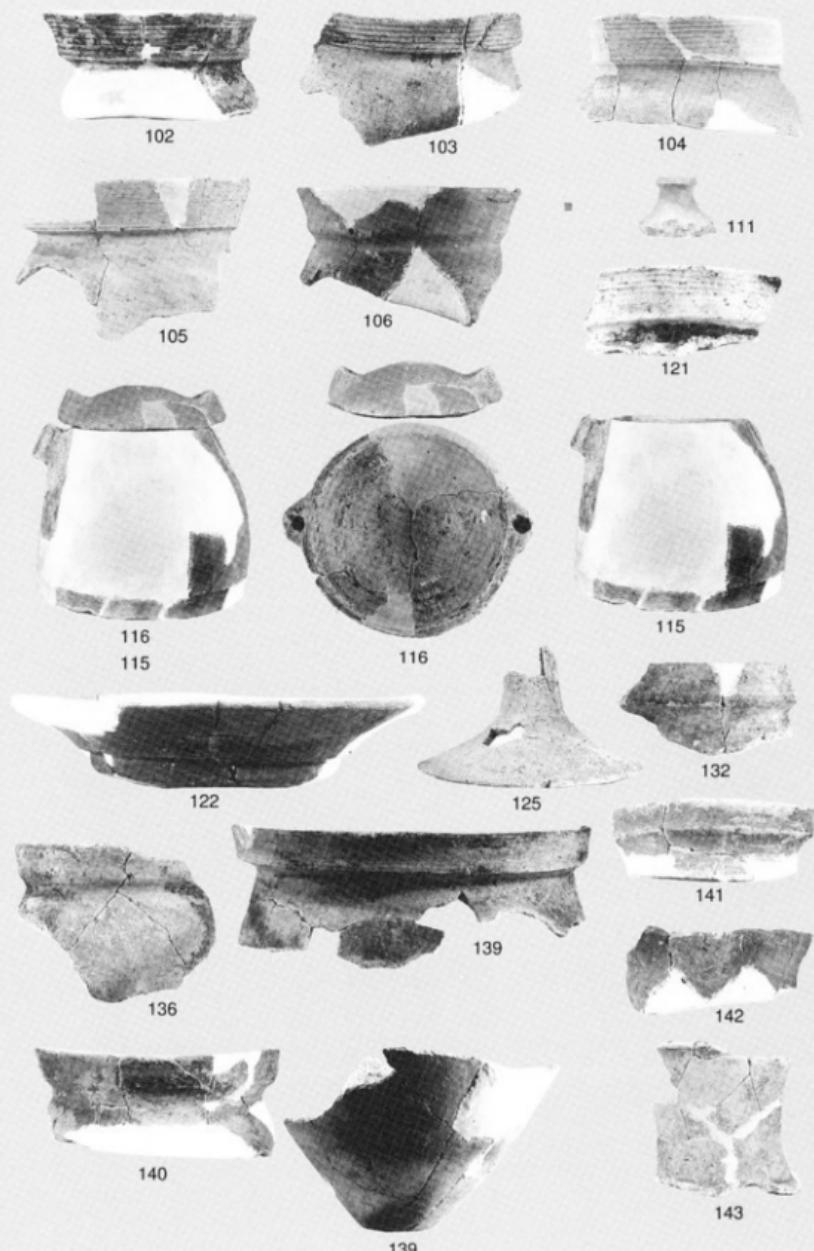
S D28 (北西から)

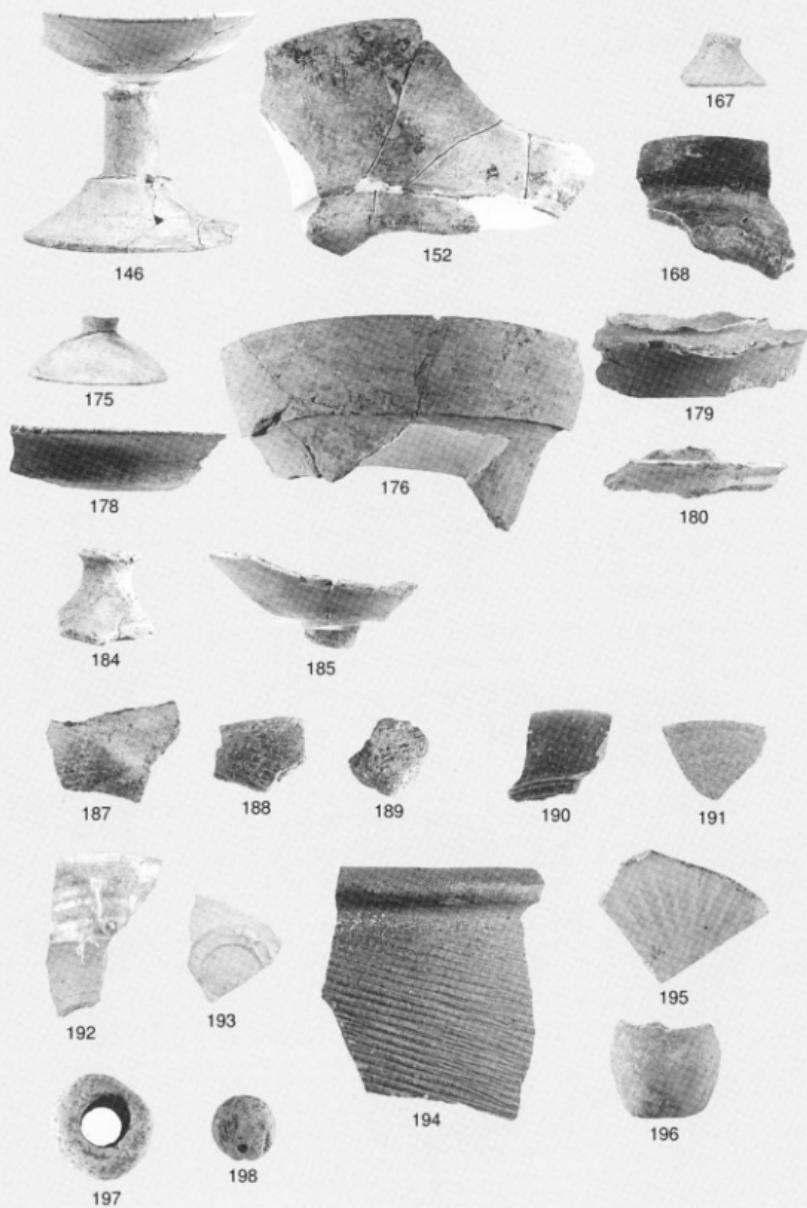


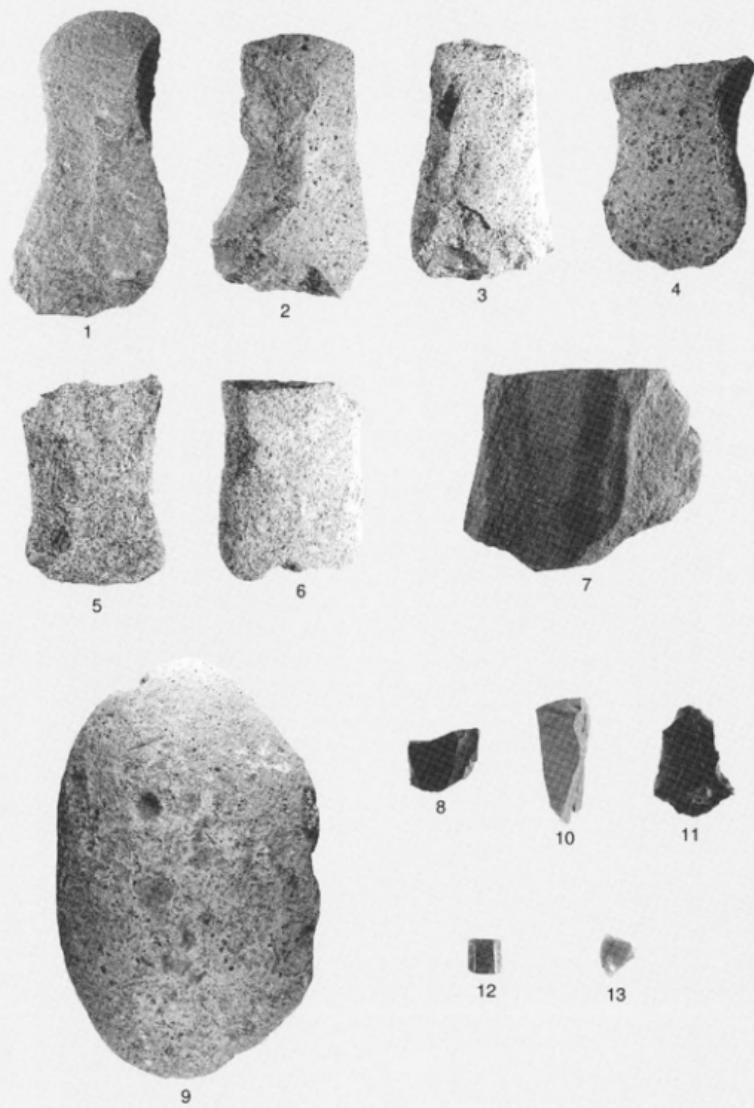
S I-3 土層断面
S X29のような石溜り
埋土状況











報 告 書 抄 錄

ふりがな	おしのうまわたりいせき						
書名	押野ウマワタリ遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
編著者名	田村昌宏						
編集機関	野々市町教育委員会						
所在地	〒921 都道府県 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1 ☎0762-46-2344						
発行年月日	西暦1992年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯 °、'	東経 °、'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おしの 押野ウマワ タリ遺跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 あいのまちおしのよんちょうめ 野々市町押野4丁目	17344 16037	36度 32分 14秒	136度 37分 24秒	1990.07.07 1990.07.18 1991.04.08 1990.05.31	300 m ² 1,300 m ²	土地区画整 理事事業に伴 う緊急発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
押野ウマワタリ	集落	弥生	竪穴建物 3棟 掘立柱建物 2棟	弥生土器 ガラス玉 管玉未製品 砥石	弥生時代後期か ら終末期にかけ ての集落遺跡 竪穴建物 3棟確	認めずれも五角 形の形をする。 内部で玉造りを行っていた。	
		中世	溝 1条	瀬戸焼 珠洲焼			

押野ウマワタリ遺跡

発行日 1992年3月

発行者 野々市町教育委員会

〒921 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1

電話 0762-46-2344

印 刷 北國書籍印刷株式会社

